

コブラ形土製品の製作技法とその機能 ーアコリス遺跡出土資料を中心としてー

花坂 哲

Archaeological Interpretation of Clay Cobra Figurines:
Based on the Study of Objects from Akoris

Tetsu HANASAKA

コブラ形土製品はデルタ地帯を中心としたエジプト国内およびレヴァント地方から出土し、これまでに 600 点以上が知られている。いずれも新王国時代末から第 3 中間期初頭に帰属する。各地の製品はコブラが起立した姿で表され、手捏ねによる粗雑品である。胴体部と台座部を別作りにする点など、大きさや形態的特徴、製作技法などに共通点が見られる。中エジプトに位置する、中小規模集落址のアコリス遺跡から 275 点のコブラ形製品が出土している。アコリス遺跡から出土した製品を中心に検討した結果、コブラ形製品は民衆によって用いられた祭具であると解釈できる。複数の比定されうる神々が推察されるが、特定の神を表すための規格性をもって製作されたとは考えにくい。コブラ形土製品の機能は、ときには穀物の豊穡であり、別の場面では子供や家族の健康であり、また病気の治癒祈願や厄除けなど、状況に応じて権能が変化する祭具であっただろう。

キーワード：コブラ形土製品、アコリス遺跡、民衆の信仰、祭具、新王国時代／第 3 中間期

This paper will focus on clay cobra figurines unearthed from Akoris in Middle Egypt. In total we have more than 600 figurines of the same type which have been recovered from Egypt and the Levant. It is possible to date them from the late New Kingdom to the early Third Intermediate Period. These figurines from the various sites are shaped roughly by hand and have some common features in their size and method of manufacture: the vertical-body part and the horizontal-base were modeled separately and put together later. From the archaeological analysis of 275 figurines from Akoris, it is suggested that the clay cobra figurines could be votive/ritual objects used by local residents. It does not seem that these figurines were made to signify a particular deity, although some deities are nominated as the identities of these figurines. It is presumed that these clay cobra figurines could be private/domestic/household votive/ritual objects providing the people with on-demand benefits such as harvest, healthy living, healing and protection from evil.

Key-word: Clay cobra figurine, Akoris, private/household religion/belief, votive/ritual objects, Late New Kingdom/Third Intermediate period

I. はじめに

本稿で取り上げるコブラ形土製品が注目され、報告や研究の対象となったのは近年に至ってのことである。その理由のひとつとして、一見しただけでは土製品と認識することが難しい点が挙げられる。コブラの姿で描かれる神像や装飾品と同じように、エジプトコブラの特徴であるフード（頸部）の広がりや造形し、鎌首を持ちあげた姿を表している。しかし、顔部や台座部が離脱していると単なる土器片と見間違がわれがちであることは、事例が示しているところである（Giddy 1999: 16; Spencer 2008: 64）。

20 世紀前半に刊行されたテル・エル＝アマルナ（Tell el-Amarna）遺跡の報告書で、コブラ形土製品が単発的に 2 点だけ報告されている（CoA I 1923: pl. XXIII-5）。その後、まとまった数の製品を取り上げ、製作技法や機能を言及するようになったのは、ようやく 1990 年代に入ってからである。その端緒として、レヴァント地方のベト・シャン（Beth Shan）遺跡（James and McGovern 1993）や、メンフィス（Memphis）地域の一画に位置するコム・ラビーア（Kom Rabi'a）遺跡の報告書が挙げられる（Giddy 1999）。さらに K. シュパコウスカ（Szpakowska）が各地に出土例があること

を言及して以来 (Szpakowska 2003)、出土例の増加や調査の見直しが起きている。現在、各地の博物館などが収蔵するテル・エル＝アマルナ遺跡出土のコブラ形土製品は126点にのぼるという (Stevens 2003, 2006)。

出土遺跡の詳細は後述するが、ベト・シャン遺跡やコム・ラビーア遺跡などコブラ形土製品の出土が知られる遺跡を辿ると、新王国時代から第3中間期にエジプト内外で広く流行していたことが窺える (James and McGovern 1993; Giddy 1999; David 2009)。コブラ形土製品のデータベース作成を精力的に行っているシュバコウスカによれば、アコリス (Akoris) 遺跡の出土例を含めて600点以上が確認されているという¹⁾。しかし、現状では発掘調査報告書等で簡単に触れられる程度であり、製作技法や機能に関する踏み込んだ議論はほとんど行われていない。

本稿ではアコリス遺跡から出土した275点のコブラ形土製品を中心に取り上げる。今後は各地で出土例の増加が見込まれるが、現在のところ、これまで知られているコブラ形土製品の約4割がアコリス遺跡から出土していることになる。出土例の製作技法や形態的特徴に共通性があることは窺い知れるところだが、アコリス遺跡出土品を詳しく分析することで、製作技法をより明確にすることができるだろう。また、遺跡の立地や属性などに眼を転じると、アコリス遺跡は中部エジプトの中小集落址である点で他の出土遺跡とはやや様相を異にする。誰が何のために製作し、どのように用いたのか、といったコブラ形土製品の機能を復元するうえで、異なる環境にある遺跡の事例は研究の発展に寄与することになるだろう。さらに、コブラ形土製品を通してみられる、民衆の信仰形態についても考察を加える。

II. 類例と形態的特徴

1. 出土遺跡と帰属年代

これまでコブラ形土製品を出土している遺跡は、ナイル河岸では南からアビドス (Abydos)、テル・エル＝アマルナ、サッカラ (Saqqara) の墓地、アコリス、メンフィス地域のコム・ラビーア、デルタ地帯西部ではコム・フィリン (Kom Firin)、テル・アブカーイン (Tell Abqas'in)、サイス (Sais)、さらに東地中海沿岸を西へ進んだザウイヤト・ウンム・エル＝ラハム (Zawiyet Umm el-Rakham)、デルタ地帯東部のカンティール (Qantir) とテル・エル＝ボルグ (Tell el-Borg)、シナイ半島のハルバ (Haruba)、レヴァント地方のベト・シャン、カミッド・エル＝ロズ (Kamid el-Loz) の各遺跡でコブラ形土製品が出土しているという (Stevens 2003; Szpakowska 2003; David 2009)²⁾。こうしてみると、ナイル河谷とデルタ地帯の境界に位置するサッカラ・メンフィス地域および下エジプト地域からの出土例が多いことが知られる。

帰属年代を示すコンテキストはいずれも新王国時代から第3中間期に及んでいる。初現は新王国時代第18王朝のアマルナ期前後にあり、出土遺跡や状況をみると、その流行は新王国時代第19、20王朝 (ラムセス朝期) にあると思われる。

上記した出土遺跡は新王国時代から第3中間期に栄えた都市や集落である。すなわち、テル・エル＝アマルナ、メンフィス、カンティール遺跡は第18王朝末から第20王朝の首都、コム・フィリンやザウイヤト・ウンム・エル＝ラハム、テル・エル＝ボルグ遺跡などは新王国時代に設置された要塞・駐屯地、ベト・シャンやカミッド・エル＝ロズ遺跡は在外の行政センターであった。シュバコウスカは、サッカラ遺跡では墓地から出土しているものの、ほとんどが居住または軍事的な遺構に関係していることに注目し、コブラ形土製品がエジプトの軍隊やその家族によって用いられた可能性を指摘しているのも、理由のないことではない (Szpakowska 2003: 119)。

出土遺跡を通覧すると、中央政府またはそれに近い管理下にあった、政治・軍事・外交的に重要な都市や集落にほぼ限られている。しかし、集落遺跡の調査が数少ないエジプト考古学の軌跡ををふり返ると、出土地が当該期の拠点的な遺跡に集中していることは、当時の状況を正しく伝えているかどうか問題がある。その意味で、地方の中小集落であったアコリス遺跡から大量のコブラ形土製品が出土していることは、多くの都市や集落で製品が普及していた旧状を示唆しているのではないか。

なお、ルクソールの対岸に位置し、「王家の谷」の造墓活動に従事した職人が暮らした街として知られるデイル・エル＝メディーナ (Deir el-Medina) 遺跡では出土例が知られていない。当該地ではコブラの姿で表されるメレトセゲル女神信仰が盛んであり、コブラの姿をした女神を描いた石板が数多く出土している。コブラ形土製品が「不明土製品」として扱われていることも考えられるが、出土例がみられない理由として、ラムセス朝や第3中間期の各王朝がデルタ地帯を活動拠点としていたため、土製品の流行がいきおい下エジプトを中心とした可能性があるだろう。

2. 形態的特徴

すべてのコブラ形土製品の構成は垂直方向に起立する「胴体部」と水平方向の「台座部」の2つに大別することができる。胴体部は比較的厚みがなく、平坦な印象を与える。また、上方が幅広く、下方に向かって先細りしている。図1のように、本稿では胴体部を上方から「頭部」「胸部」「脚部」、頭部の前方に突き出た個所を「顔部」と呼び分ける。台座部は胴体部に比べると厚みを持ち、側面および上面から見ると三角形または台形に近い形状をしている。台

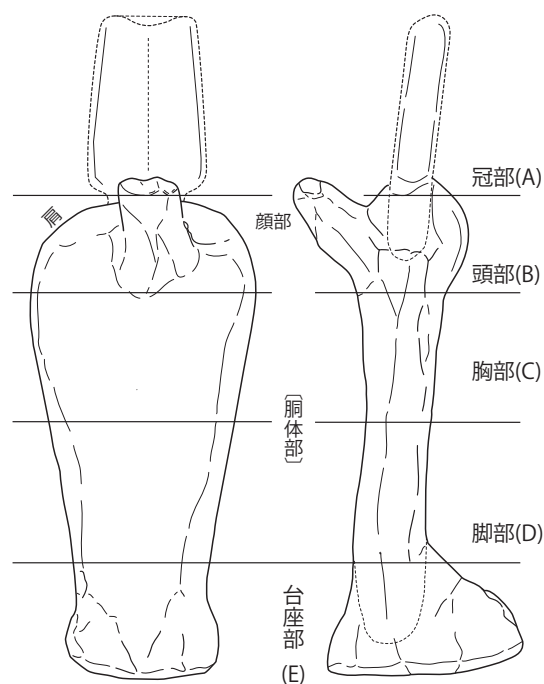


図1 部位呼称模式図（左：正面；右：側面）

座部から胴体部（脚部）が立ちあがり、側面から見たときのコブラ形土製品の形状はアルファベットのZ状（またはS状）を呈する。製作技法は手捏ねで、ヘラなどの工具を使わず、指で表面を滑らかにした程度の粗略な整形である。

(1) テル・エル＝アマルナ遺跡（図2-1, 2）

A. スティーブンス（Stevens）によれば、報告書に記載された以外にも多くのコブラ形土製品が出土しており、その数は126点を数えるという。そのうち70点以上が「Workmen's Village」から、35点が「Main City」から出土している（Borchardt and Ricke 1980; Stevens 2006: 100）³⁾。なお、「Main City」での発掘調査が継続しており、最近刊行された報告書に新たに3点の製品片の出土が報告されている（Kemp and Stevens 2010: 222-223）。

テル・エル＝アマルナ遺跡では「コブラボウル（Cobra Bowl）」と呼ばれる、土器の内底にコブラ像を貼り付けた土器が出土している（Kemp 1981: 15; Rose 2007: 70）⁴⁾。台座部を除いて、頭部や胴体部の外観は等しく、平らな台座部を持つ自立したコブラ形土製品であるのか、土器の内底に貼り付けたコブラ像なのか判別することは難しい。なお、スティーブンスが取り上げた126点のうち、少なくとも40点は平らな台座部を持っているという（Stevens 2006: 100）。

完形品はわずかであり、破片は5～20cmをはかる（Stevens 2006: 100）。1923年刊行の報告書に掲載された2

点のうち、英国・ボルトン博物館所蔵例（1922/No.140）は、欠損している台座部分を除き、高さ13.6cm、幅8.3cmである。もう1点の大英博物館所蔵のほぼ完形の製品（1922/No.131）は、高さ12.0cm、幅8.0cm、台座部の長さ10.2cmとなっている（図2-1, 2; CoA I 1923: pl. XXIII-5; Szpakowska 2003）。これら2つの所蔵品は他遺跡出土のコブラ形土製品に比べると胴体部の幅がやや広いように見受けられる。

頭部は胴体部の上端を折り曲げ、大きく前方に突き出している。頭上に冠などを戴いていた可能性があるが、ボルトン博物館所蔵品には浅い窪みが、また、大英博物館所蔵品にはわずかな突起が残存しているだけである。日輪がついていたと記載されることがあるが、それが日輪であると同定することはできないという（Stevens 2006: 100）。

これら2つの土製品には、上端がボウル状に窪んだ「供物台」と見做される細長い突起物が胴体部前面に付いている⁵⁾。大英博物館所蔵品は、その供物台の両脇に「ミニチュアコブラ」と呼ぶ小さな粘土塊を持ち、さらに台座上面から胴体部の後面にかけて、細い粘土ヒモで尾部を表現している。両例ともに彩色痕が残り、ボルトン博物館所蔵品には赤い水平線が、大英博物館所蔵品の後面には赤と黄色の縦縞がみえる。

(2) コム・ラビーア遺跡（図2-8～10）

コム・ラビーア遺跡では45点の出土が報告され、形状、胎土、製作技法、分布、使用方法などが論じられている（Giddy 1999: 13-28）。製品の多くが第18王朝中～後期（Level III）からラムセス朝期（Level II）の層から出土している（Giddy 1999: Fig. 1.5; Jeffreys et al. 1986）⁶⁾。

製品片の台座部を含む高さは7～10cm、唯一の完形に近い製品は、高さ14.7cm、幅6.3cm、台座部の長さ10.6cmである（図2-9; EES462, EES545/Giddy 1999: pl. 4）⁷⁾。なかには胴体部の幅が11.5cmという大きな製品もある（EES522/Giddy 1999: pl. 4）。

胴体部はいずれも胸部から脚部にかけて先細りし、側面は丸みを備えている。頭部から胸部にかけての肩部は「隅丸」または「なで肩」状で、胴体部は全体として長楕円形または細長い涙形を呈す。胴体部の上端を折り曲げて、前傾した頭部を作り出している。しかし、ほとんどの製品で頭部先端が破損しており、眼の有無など顔部の詳細は不明である。また、頭頂部に頭飾りなどが付いていた痕跡は確認できない。

出土した45点のうち半数近くが台座部を含んだ製品であり、台座部の長さは6～10cmである。台座部の上面に蛇行する粘土ヒモが貼り付けてあり、これが尾部を表現している。また、テル・エル＝アマルナ遺跡の出土例にみられたように、胸部前面に2つの細長い粘土塊を持つ例が8



図2 コブラ形土製品類例(縮尺不同):
1-2: テル・エル=アマルナ遺跡、3-4: コム・フィリン遺跡、
5-8: ベト・シャン遺跡、8-10: コム・ラビーア遺跡

点、1つだけが3点ある。これらは現実のエジプトコブラの身体的特徴(skin flaps)を模しているか、「ミニチュアコブラ」を表しているかもしれないという。また、半月状または窪んだ臍のようなものを持つ製品も3ないし4点あり、「供物台」を表している可能性がある。彩色を施した例は6点で、これらのなかには前面、後面ともに格子状の朱線を引いた製品がある(図2-10; EES521/Giddy 1999: 14, pl. 3)。

胴体部と台座部を別作りした後に、先細りした脚部(胴体部先端)を台座部に挿し込んで接合したことが窺える製品が数点出土している(図2-8; Giddy 1999: 15)。接合面は新たな土を被せて表面を整形しており、これらは製作工程を窺わせる。

(3) コム・フィリン遺跡(図2: 3, 4)

コブラ形土製品が60点程出土しており(Spencer 2006, 2007, 2008; British Museum 2008)⁸⁾、報告者によって「遺跡のいたるところで出土する」という印象が述べられている。出土遺構は新王国時代後半から第3中間期初期に年代

づけられ、神殿域ではなく一般住居址域から出土している(Spencer 2008: 64)。なお、2009年シーズンは末期王朝時代の遺構が調査されているが、コブラ形土製品の出土は報告されていない(British Museum 2009)。このことはコブラ形土製品の製作、使用期間が第3中間期で終わっていたことを示している。

完形品は1点もなく、ほとんどが胴体部の途中で破損しているため、本来の大きさを知ることはできない。現存する胴体部の高さは7~8cmであることから、復元した際の高さは10cmほどになると思われる。管見の中で最大の製品は、台座を含まない胴体部のみの高さが14.5cm、幅が6.0cmである(図2-3; F219/Spencer 2008: pl. 167)。

他例と同様に胴体部は先細りした長楕円形または細長い涙形で、側面に丸みを持つ。胴体部の上端を折り曲げて頭部を作り、その側面を指で押さえた窪みで眼を表現している。ほとんどの製品は頭部や頭頂部が欠損しているが、1点だけ頭飾りが遺存している例がある(F755/British Museum 2008: pl. 41)。

台座部は胴体部に比べて出土点数が少ない。点数の少な

さによる制約はあるが、その形状は先述した2遺跡の出土例よりも、長さが短く、上面に付く尾部の表現が簡略である。胴体部と台座部の接合箇所を見ると、尾部を造形したというよりも胴体部を後ろから支えるために粘土塊を盛り足したという印象を受ける。報告書では、胴体部と台座部を別作りにしてから接合したという明確な証拠はない、としている（Spencer 2008: 64）。しかし、実測図や写真を見る限り、胴体部と台座部の接合面にわずかな段差があり、柄（ホゾ）状に突き出した脚部先端やそれを挿し込むための台座部の窪みなどが確認できる。このことはコム・フィリン遺跡出土のコブラ形土製品もまた、他例と同様に別作りの胴体部を台座部に挿し込んだことを示しているだろう。

胴体部の中央、胸部前面に長さ3～4cmの小さな粘土塊が貼り付けてある（図2-4）。中央に1つ付く点ではテル・エル＝アマルナ遺跡出土品に類似しており、その形状から「供物台」または「ミニチュアコブラ」の可能性が指摘されている（Spencer 2008: 65）。また、彩色が施されている製品は非常に少なく、わずかに2点確認できるだけである（F718/British Museum 2008: pl. 38; F007/Spencer 2008: 64）。

(4) ベト・シャン遺跡（図2-5～7）

発掘調査が戦前から断続的に続いており、1930年刊行の報告書がすでにコブラ形土製品を取り上げて以来、現在までに40点ほどが報告されている（James and McGovern 1993: 171-172; David 2009: 556-560）。一般住居址コンテキストから多くが出土しており、出土層位（Level VIII-V）は第19王朝初頭から第20王朝に位置付けられる（David 2009）⁹⁾。

ほぼ完形の製品は高さ14.5cm、幅8.0cm、台座部の長さが8.4cmとなっている（James and McGovern 1993: fig. 83-7, pl. 39f）。胴体部の大きさは高さ8～12cm、幅6～8cmをはかる。上記3遺跡の出土品と同様に、先細りした長楕円形または細長い涙形を呈する。報告書の記述では、頭部は別作りとあるが（David 2009: 558）、写真や図面を見る限り、胴体部の上端を折り曲げて頭部を作り出しているように見受けられる。また、頭頂部に頭飾りの痕跡はみられない。

台座部は胴体部よりも数が多く、上方から見ると三角形に近い形状をしている。上面に尾部を貼り付けた薄い台座部に加えて（図2-7）、コム・フィリン遺跡出土品と類似した、厚手の作りとなっている台座部の例も多い。また、胴体部と台座部を別作りにした後に接合したことが、X線分析から明らかとなっている。接合方法は胴体部の後面を台座部で支え、前面から粘土塊で補強する方法（James and

McGovern 1993: pl. 15b）と胴体部を台座部の窪みに挿し込む方法（James and McGovern 1993: pl. 15c）の2種類がX線写真から見てとれる。

胸部に2つの粘土塊の装飾を持つ例が多く（図2-5, 6）、粘土塊を貼り付けた位置が高く、小さいために、1993年刊行の報告書では「胸」としている（James and McGovern 1993: 171）。呼称の差異はあるが、他遺跡出土品にみられる「ミニチュアコブラ」と同じ類のものであろう。なお、彩色は数点で確認されている。

3. 小結

4つの遺跡で出土したコブラ形土製品の形態的特徴を概観してきたが、それらを簡潔にまとめておく。

各遺跡で出土している製品の大きさは近似しており、台座部を含む高さが12～15cm、幅が6～8cmであったと復元される。胴体部の形状は上方から下方に向かって先細りし、厚みが1～2cmの長楕円形または細長い涙形を呈している。顔部は胴体部の上端を前傾させるように折り曲げて作り、そこに粘土を足す場合もある。また、顔部に眼を表現した例も散見される。

製品を上方および側面から見た際、台座部は隅丸の三角形または台形と呼べる形状である。しかし、出土遺跡によって若干の差異がみられる。テル・エル＝アマルナ遺跡とコム・ラビーア遺跡の出土品の台座は長く、比較的薄い板状を呈する一方で、コム・フィリン遺跡出土のものは短く、厚みを有する。なお、ベト・シャン遺跡出土の台座は両方の種類が出土している。これらの違いは台座部上面に付く尾部の有無にも表れている。すなわち、薄い台座には粘土ヒモによる尾部が明確に表現され、厚みがある台座部にはそれがみられない。

コブラ形土製品の装飾として粘土塊と彩色が挙げられるが、いずれもその数は多くない。粘土塊は胴体部の前面に貼り付けたもので、粘土塊は「供物台」や「ミニチュアコブラ」と呼ばれる。「供物台」と見做される理由は、粘土塊の上端がわずかにボウル状に窪んでいるためであろう。しかし、いずれも粘土を細長く丸めたアップリケであり、何を表したのか明瞭ではない。続いて彩色だが、顔料は朱色が多く、黄色や黒色も使っている。文様は単純なものばかりで、ヨコ縞やタテ縞や格子状などの線が引かれている。頭頂部の頭飾りに言及されることもあるが、その痕跡はほとんどみられない。

製作技法の特徴は、胴体部と台座部を別作りにして、接合する点にある。これはベト・シャン遺跡出土品のX線分析からも明らかになっているし（James and McGovern 1993: pl. 15）、他の製品をみても接合部の状態や脚部先端の形状などからも推察される。頭部および顔部は胴体部の

上端を折り曲げ、別の粘土塊を少し加えることもある。手捏ねで粗く成形され、工具を使わず、指で整形を行っている。

Ⅲ. アコリス遺跡出土のコブラ形土製品

1. アコリス遺跡と調査地区の概要 (Akoris 1995; PR Akoris 2002-2009)

アコリス遺跡¹⁰⁾は中部エジプトのエル＝ミニヤ (al-Minya) の市街区の対岸から10kmほど北に行ったナイル河東岸に位置する。ティフナ・エル＝ジャバル (Tihna al-Jabal) 村に隣接し、耕作地と東部砂漠を隔てる境界にテル状をなしている。石灰岩段丘が途切れて島状に取り残された高さ30mほどの岩山が遺跡のランドマークとなっており、岩山の北裾には中王国時代や第3中間期の岩窟祠堂や、多柱室を持つローマ時代の神殿 (西方神殿) などが営まれ、東裾にはグレコ・ローマン時代の岩窟墓が無数に穿たれている (Bernand 1988)。岩山の北側 (北東) に南北500m×東西300mほどの「都市域」が広がり、表層にはグレコ・ローマン時代の日乾レンガ建造物址が残っている。本稿で取り上げるコブラ形土製品が出土したのは、岩山西裾のシャフト墓が連なる「西地区」と、岩山南側に広がった日乾レンガ建造物が残る「南地区」である。

西地区は現在の耕作地を眼下に臨み、10mほどの高さで段丘が幅5～10mのテラスをなしている。テラス上には南北180mほどに亘って墓群が連なり、その数は60基ほどを数える。多くは1m四方の開口部を持った深さ1～2mのシャフト墓で、シャフトの底から水平方向に墓室を穿つ例が多い。また、中王国時代とプトレマイオス朝期の岩窟祠堂もここに造られている。

もう一方の南地区は、岩山と南へ延びる岩丘との谷間に位置する。西地区とともに2002年から発掘調査を継続し、その調査域は南北140m×東西50mに達している。やや急な勾配を持つ岩山の南裾野 (南地区北斜面) から調査を始め、2008年シーズン以降は、谷底の南北50mの平坦面と南に延びる岩丘の比較的緩やかな斜面 (南地区南斜面) に調査対象を広げた。南北両斜面や平坦面に日乾レンガ製住居址や穀物倉庫らしい円形遺構が密集し、街路が住居群を貫き、ピット墓が散在する。また、南斜面上方にグレコ・ローマン時代の岩窟横穴墓が数多く造営されている¹¹⁾。一般の農耕集落と区別されるこの南地区の特徴は、皮革工房や簡易の金属加工施設など手工業生産に関係する遺構が見つまっている点にある。また、未焼成のまま潰れてしまった土器、紡錘車、花形文様ビーズ用の土製鋳型、製作途中のガラス製ビーズ、ファイアンス製セクメト女神像の土製鋳型など、この地で手工業生産が行われたことを示す遺物が数多い (PR Akoris; 花坂 2004, 2005, 2006)。当時の主要

な居住域は岩山北側に広がる「都市域」にあったと考えられるので、この南地区は生産活動に従事する人びとの工房域であり居住域であったのだろう。

2. 出土コンテキストおよび帰属年代

アコリス遺跡では2002年より調査を開始した「西地区」と「南地区」で合計275点のコブラ形土製品が出土している (PR Akoris 2002-2009)。各地区の概略については上述したが、出土コンテキストを掘り下げながら詳細をみていくことにする。

(1) 西地区

西地区では合計27点のコブラ形土製品が出土している。一帯は古王国時代に造営された墓域となっており、60基余りの墓が確認されている。このうち未盗掘で発見された墓はごくわずかで、多くは第3中間期から末期王朝時代にかけて再利用されたことが、出土する土器や木棺、その他の遺物から明らかになっている。出土の状況から考えて、コブラ形土製品も墓域が再利用された時代に属するものである。

出土した27点のうち12点が古王国時代の岩窟マスタバ墓周辺から出土している¹²⁾。出土場所の内訳だが、マスタバ墓上面の北シャフトから6点、北シャフトの墓室から1点、入口墓道から3点、ファサード前から2点となっている。また、マスタバ墓以外から出土した残る15点のうち、シャフト墓およびトゥーム・チャペル型横穴墓から12点、岩盤テラス上の埋土から3点を数える。いずれもシャフトなどに流れ込んだ埋土中から出土しており、副葬品でないことは明らかである。

墓域から木棺や人骨が出土することから、再利用後も埋葬地であったことに間違いはない。それと同時に、西地区の墓域は岩窟マスタバ墓を中心として、信仰の場として再利用されていたことが推察される。これを示唆する遺物として、北シャフトから出土した土製の小型厨子や¹³⁾、シャフト墓から出土したワニ形土製品が挙げられる¹⁴⁾。いずれも未焼成の粗雑品である。さらに、ファサード前では編み籠に入ったネコのミイラが見つかった¹⁵⁾。また、マスタバ墓北側の入口墓道は低い日乾レンガ壁で区画され、その一画から煮沸用土器や、エブリ (柄振) と風選用スコップといった木製農具が出土している (PR Akoris 2002: 11-15)。周辺には居住や炊事等の生活の痕跡がないため、これらの道具は日常生活ではなく、祭祀に用いた可能性がある。コブラ形土製品も同様に祭具とするのが、出土状況からみてふさわしいだろう。これらの出土品がいずれも粗雑な作りであることから、祭祀の担い手は民衆であったと考えられる。なお、なぜ墓域で祭祀を行うのかという問題に

については、稿を改めて論じることしたい。

(2) 南地区

続いて、250点近くのコブラ形土製品が出土している南地区をみていく。南地区北斜面の上方に位置する岩山壁面に、グレコ・ローマン時代の双子の神であるディオスクロイ (*Dioskuroi*) のレリーフが女神と2頭の馬とともに刻まれている¹⁶⁾。現代においても参詣の対象となっており、眼を引くものではあるが、しかし、グレコ・ローマン時代の人間活動の痕跡は表層の一部にとどまり、南地区一帯は地表面から10cmほど掘り下げただけで新王国時代から末期王朝時代に及ぶ堆積層が出現する。堆積が最も厚い地点で、自然岩盤から地表面まで2.2mほどをはかる。

平坦面や斜面にかかわらず、堆積層から日乾レンガ製の住居址や円形穀物倉庫址が検出されている。また、手工業生産に関係する遺構や遺物が地区全体に点在することから、南地区は手工業生産に従事する人びとの工房域かつ居住域であったと考えられる。その活動時期は第3中間期を中心とした前12世紀から前8世紀に属することが、土器資料などから知られる。

また、浅く掘られたピット墓から女性と子供を中心とした40体近くの人骨が出土している。亜麻布の包帯が巻かれ、ミイラ化処理を施した丁寧な例もあるが、護符のような副葬品を伴う例はごく稀である。ヒト形木棺や箱形木棺は再利用品が多く、複数体の人骨が1つの木棺から出土することもある。これらの造墓は、堆積状況や共伴する遺物から南地区における人間活動の最終段階にあたると考えられる。しかし、南地区が居住地として完全に放棄され、日乾レンガ遺構が崩壊した後の時代のことではなく、連続した時期または同時期に重なる段階のことであつたろう¹⁷⁾。

さて、コブラ形土製品の南地区における出土地点だが、斜面や平坦面に関わらず地区全域に及び、特定の地点に集中する傾向はない。ただし、堆積が厚く、他の遺物の出土量が多い地点では、コブラ形土製品も数多い¹⁸⁾。グレコ・ローマン時代の日乾レンガ遺構に伴って出土することはない、帰属年代は南地区の活動期間の中心にあたる第3中間期とその前後の時代であることは疑いない。

出土コンテキストは、住居址や円形倉庫址や工房址、または道路などの生活遺構に伴った埋土から出土している。ピット墓の副葬品として納められたものはないが、埋葬個所の近くに安置した可能性は残る。しかし、いずれの遺構においても、原位置を保って出土している製品は1点もなく、すべてが埋土に混在した状態である。これらのことはコブラ形土製品を床に直接置いたのではなく、壁龕などに設置し、壁の崩壊に伴って埋土に混在した可能性を示しているだろう。しかし、あらゆる地点から出土しているため、

設置場所や使用方法を復元することは難しい。

3. 形態的特徴と製作技法 (表1、図1～5)

前節では、遺構の性格が全く異なるため、西地区と南地区を区別して記述してきた。だが、両地区で出土するコブラ形土製品に形態的な差異は認められず、出土する遺構の時期もほぼ同一と考えて誤りない。そこで、以下では出土地区は考慮せず一括して扱う。また、第2章第2節の冒頭で述べたように、コブラ形土製品を頭部 (B)・胸部 (C)・脚部 (D) (あわせて胴体部)・台座部 (E) に分け、さらに、頭部の上に付く冠部 (A) を加えた5つの部位に分けて記述を進める。

これまでにアコリス遺跡で出土した275点のうち、ほぼ完形の製品 (G) は8点 (3%)、台座部を欠くが頭部から脚部まで遺存している製品 (F) は31点 (11%) を数える。その他の部位別の出土点数は表1に示した通りであるが、全体の85%以上にあたる236点が破片であるため、完形品に換算したコブラ形土製品の精確な数は不明である。そこで、1つの製品につき1つずつしか存在しないであろう頭部と台座部を数えてみると、頭・胸部 (BC) の出土点数が104点 (38%)、脚・台座部 (DE) および台座部 (E) を合わせると96点 (35%) に達する。そして、仮にこれらが同一個体として接合できた場合、完形品は100点ほどになる。さきの遺存状態の良いFとGをこれに加えると少なくとも140点あまりの製品が発掘区域内に存在していたことになる。この140点という数の多さは依然として他遺跡をはるかに凌いでおり、アコリス遺跡出土品の重要性はさらに際立つことになろう。

次にアコリス遺跡出土のコブラ形土製品の形態的特徴を第2章で取り上げた他遺跡出土の類例品と比較しながら記述していく (図3～5)。

頭部から台座部まで残っている、ほぼ完形のG:8点の平均値は、高さ12.4cm、幅5.4cmである。Gに続いて遺存状態が良く、台座部を除く、頭部から脚部までの胴体部がほぼ残っているF:31点の平均値は、高さ9.6cm、幅5.1cmをはかる。なお、アコリス遺跡出土の最大の製品は、高さ14.8cm、幅6.6cm、台座部長さ (奥行) 6.4cmである (図3-1)。各部位の残存状態とその大きさをみると、いずれの例も高さ10～15cm、幅5～7cmの範囲を出ないと思われる。類例と比べると、幅がやや細身の製品が多い印象を受けるが、概して同じ大きさと言って良いだろう。

胴体部は類例と同じように胸部から脚部にかけて先細りしており、このことは数値にも表れている。頭・胸部が残るBC:104点の平均の幅は5.4cm、胸部のみが残るC:7点の平均の幅は5.7cmをはかる。これに対し、胸・脚部が残るCD:15点の平均の幅は4.8cm、脚部のみが残るD:

表1 アコリス遺跡出土コブラ形土製品一覧

No.	図版 No.	部位	高さ	幅	厚さ (長さ)	冠部	頭部	顔凸	胸部	肩	脚部	台座	朱線	出土区
1		A 冠部?	1.83	1.79	1.14	—	—	—	—	—	—	—		S09K
2		A 冠部?	2.11	2.67	2.18	—	—	—	—	—	—	—		S06E
3		A 冠部?	3.34	2.68	2.42	—	—	—	—	—	—	—		S06D
4	4-1	A 冠部?	4.18	3.32	—	軸	—	—	—	—	—	—		S03e-F
		A 平均	2.87	2.62	1.91									
5		AB 頭・冠部	2.36	3.66	—	軸	○	×	—	—	—	—		S07B
6	4-2	AB 頭・冠部	4.06	4.68	3.78	軸	○	○	—	—	—	—		S09K
7	4-3	AB 頭・冠部	4.06	4.76	3.23	軸	○	○	○	◎	—	—		S04B
		AB 平均	3.49	4.37	3.51									
8		BC 頭・胸部	3.20	5.72	—	軸	○	○	○	△◎	—	—		S04E
9		BC 頭・胸部	3.32	5.87	—	軸	○	○	○	△	—	—		S05C
10		BC 頭・胸部	3.65	4.74	—	?	○	×	○	△	—	—		S07E
11		BC 頭・胸部	3.73	4.92	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S03/06G
12		BC 頭・胸部	3.81	4.53	—	凹	○	×	○	△	—	—		S07E
13		BC 頭・胸部	4.15	6.75	—	凹	○	○	○	—	—	—		S05D
14		BC 頭・胸部	4.41	5.52	—	軸	○	○	○	◇	—	—		S06J
15		BC 頭・胸部	4.42	3.63	—	凹	○	○	○	△	—	—		S08K
16	4-4	BC 頭・胸部	4.50	5.00	3.70	凹	○	○	○	◎	—	—	○ 2	S10L
17		BC 頭・胸部	4.51	5.22	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07C
18		BC 頭・胸部	4.58	4.65	3.60	軸	○	○	○	◎◇	—	—		S03w-B
19		BC 頭・胸部	4.91	4.75	3.44	軸	○	○	○	◇◎	—	—		WestOKM
20		BC 頭・胸部	5.20	6.90	2.90	軸	○	○	○	◎	—	—		WestOKM
21		BC 頭・胸部	5.20	4.80	2.00	軸	○	○	○	◎	—	—		S10M
22		BC 頭・胸部	5.30	5.50	4.10	軸	○	○	○	◎	—	—		WestOKM
23		BC 頭・胸部	5.38	5.32	2.55	?	○	○	○	△?	—	—		WestOKM
24		BC 頭・胸部	5.48	5.58	—	軸	○	○	○	◎	—	—		WestT26
25		BC 頭・胸部	5.50	5.30	—	軸	○	○	○	△?	—	—		S03w-B
26		BC 頭・胸部	5.58	4.25	—	軸	○	×	○	△	—	—		S07C
27		BC 頭・胸部	5.67	4.98	3.58	軸	○	○	○	△	—	—		S09K
28		BC 頭・胸部	5.75	4.61	—	軸	○	×	○	◎	—	—		S04E
29		BC 頭・胸部	5.79	4.97	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S05B
30		BC 頭・胸部	5.80	6.08	2.78	凹	○	○	○	◇◎	—	—		S09K
31		BC 頭・胸部	5.80	4.42	3.10	凹	○	○	○	◎	—	—		S04C
32		BC 頭・胸部	5.80	5.70	3.60	軸	○	○	○	◎	—	—		S10L
33		BC 頭・胸部	5.95	5.43	—	凹	○	○	○	△	—	—		S09K
34		BC 頭・胸部	5.98	4.54	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S04D
35	4-5	BC 頭・胸部	5.98	4.34	3.40	軸	○	○	○	◎△	—	—		S05C, D
36		BC 頭・胸部	6.00	5.00	3.20	軸	○	○	○	◎	—	—		WestT35
37		BC 頭・胸部	6.20	5.50	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07B
38		BC 頭・胸部	6.25	7.93	—	凹	○	○	○	◇	—	—		S05B
39		BC 頭・胸部	6.26	6.22	—	?	○	○	○	◎	—	—		S06I
40		BC 頭・胸部	6.36	5.05	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S03e-B
41		BC 頭・胸部	6.36	4.77	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S06wI
42		BC 頭・胸部	6.38	4.78	—	軸	○	○	○	◎	—	—		表採
43		BC 頭・胸部	6.39	5.09	3.30	軸	○	○	○	△	—	—		WestOKM
44		BC 頭・胸部	6.43	4.19	1.90	?	○	○	○	◇	—	—		WestOKM
45		BC 頭・胸部	6.50	5.20	—	?	○	○	○	◎?	—	—		S04B
46		BC 頭・胸部	6.52	5.67	2.60	軸	○	○	○	◎	—	—		S06D
47		BC 頭・胸部	6.55	6.50	2.82	凹	○	○	○	◇	—	—		S06D
48		BC 頭・胸部	6.56	5.82	3.10	軸	○	○	○	△◎	—	—		S05C
49	4-6	BC 頭・胸部	6.59	5.59	5.38	軸	○	○	○	◎	—	—		WestOKM
50		BC 頭・胸部	6.64	5.15	3.19	凹	○	○	○	◇◎	—	—		S09K
51		BC 頭・胸部	6.70	5.10	3.90	軸	○	○	○	△	—	—		S10L
52		BC 頭・胸部	6.77	5.45	—	軸	○	○	○	◇◎	—	—		S07C
53		BC 頭・胸部	6.80	6.00	3.00	軸	○	○	○	◎	—	—		WestOKM
54		BC 頭・胸部	6.83	4.35	—	×	○	○	○	△	—	—		表採
55	4-7	BC 頭・胸部	6.90	6.53	4.86	凹	○	○	○	◎	—	—		WestOKM
56		BC 頭・胸部	6.94	5.57	—	軸	○	○	○	◇◎	—	—		S07C

No.	図版 No.	部位	高さ	幅	厚さ (長さ)	冠部	頭部	顔凸	胸部	肩	脚部	台座	朱線	出土区
57		BC 頭・胸部	7.00	6.30	—	軸	○	○	○	△	—	—		S04C (05)
58		BC 頭・胸部	7.09	5.62	—	凹	○	○	○	◎	—	—		S04E
59		BC 頭・胸部	7.10	5.15	—	凹	○	×	○	◎	—	—		S07C
60		BC 頭・胸部	7.10	6.00	4.80	軸	○	○	○	△	—	—		S10L
61		BC 頭・胸部	7.16	4.67	—	軸	○	○	○	△	—	—		S08K
62		BC 頭・胸部	7.18	6.13	—	軸	○	○	○	*	—	—		WestT17
63	4-8	BC 頭・胸部	7.18	5.73	5.20	軸	○	○	○	◎	—	—		S04B (05)
64		BC 頭・胸部	7.22	4.24	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S03e-E
65		BC 頭・胸部	7.23	5.16	—	軸	○	○	○	△	—	—		S06J
66		BC 頭・胸部	7.28	4.96	—	軸	○	○	○	△	—	—		S03w-F
67		BC 頭・胸部	7.31	6.13	—	軸	○	○	○	◎	—	—		表採
68		BC 頭・胸部	7.31	4.84	—	凹	○	×	○	◎	—	—		S07C
69		BC 頭・胸部	7.32	4.98	—	軸	○	○	○	◇	—	—	○ 4	S07C
70		BC 頭・胸部	7.36	5.28	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07C
71		BC 頭・胸部	7.42	4.72	—	軸	○	○	○	△	—	—		S07E
72		BC 頭・胸部	7.47	4.55	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07C
73		BC 頭・胸部	7.48	5.05	—	軸	○	○	○	△	—	—		S05C, D
74	4-9	BC 頭・胸部	7.48	5.20	3.96	軸	○	○	○	◎	—	—	○ 2	S09K
75		BC 頭・胸部	7.52	6.06	—	?	○	○	○	◇	—	—		S07C
76		BC 頭・胸部	7.56	3.80	3.92	凹	○	○	○	◇	—	—		0S4E
77		BC 頭・胸部	7.63	4.82	3.09	軸	○	○	○	◎	—	—		S09K
78		BC 頭・胸部	7.67	4.79	3.66	凹	○	○	○	◎	—	—		S09K
79	4-10	BC 頭・胸部	7.75	5.78	3.00	軸	○	○	○	◎△	—	—	○ 2	S03e-C
80		BC 頭・胸部	7.78	5.51	—	軸	○	○	○	△	—	—		S03e-C
81		BC 頭・胸部	7.79	4.46	3.71	軸	○	○	○	◎	—	—		S09K
82		BC 頭・胸部	7.83	4.86	3.00	軸	○	○	○	◇	—	—		S06wJ
83	4-12	BC 頭・胸部	7.94	4.21	2.80	×	○	○	○	△	—	—		S05A, B
84		BC 頭・胸部	7.96	4.99	—	凹	○	○	○	△	—	—		表採
85		BC 頭・胸部	8.02	6.99	—	凹	○	○	○	◇	—	—	○ 2	S07E
86		BC 頭・胸部	8.08	5.46	—	軸	○	○	○	△?	—	—		S04E
87		BC 頭・胸部	8.14	4.60	2.30	凹	○	○	○	◎	—	—		S06I
88		BC 頭・胸部	8.22	5.39	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S04D
89		BC 頭・胸部	8.26	5.41	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S03w-E
90		BC 頭・胸部	8.27	4.76	3.29	軸	○	○	○	△	—	—		S09K
91		BC 頭・胸部	8.30	5.00	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S08K
92		BC 頭・胸部	8.38	7.84	—	軸	○	○	○	◎	—	—		WestAB
93	4-11	BC 頭・胸部	8.45	6.42	3.24	軸	○	○	○	◎◇	—	—	○ 2	S04E
94		BC 頭・胸部	8.45	4.69	4.70	軸	○	○	○	◎△	—	—		S06wJ
95		BC 頭・胸部	8.50	4.60	2.30	軸	○	○	○	△	—	—	○ 1	WestT2
96	4-13	BC 頭・胸部	8.51	5.59	5.70	軸	○	○	○	△	—	—		S04C
97		BC 頭・胸部	8.53	4.43	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07C
98		BC 頭・胸部	8.57	5.06	3.42	軸	○	○	○	△	—	—		S04D
99		BC 頭・胸部	8.60	5.28	—	軸	○	×	○	◎	—	—		S07B
100		BC 頭・胸部	8.61	5.65	3.69	軸	○	○	○	◎	—	—		S09K
101		BC 頭・胸部	8.71	5.26	—	×	○	○	○	◎	—	—		S05C
102		BC 頭・胸部	8.88	5.69	2.61	軸	○	○	○	◇	—	—		S06J
103		BC 頭・胸部	8.96	5.73	—	軸	○	○	○	◎	—	—		S07C
104		BC 頭・胸部	9.69	5.19	—	軸	○	○	○	△◎	—	—		S07B
105		BC 頭・胸部	9.75	6.68	2.79	凹	○	○	○	◎	—	—		S09K
106		BC 頭・胸部	9.89	5.10	—	凹	○	○	○	◎	—	—		S08K
107		BC 頭・胸部	10.09	5.21	—	凹	○	○	○	◎	—	—		S05D
108		BC 頭・胸部	10.40	6.44	—	軸	○	○	○	◇	—	—		S07B
109		BC 頭・胸部	10.50	7.17	—	軸	○	○	○	◇◎	—	—		WestT26
110		BC 頭・胸部	10.90	5.20	—	凹	○	○	○	◎	—	—		S04B
111	3-16	BC 頭・胸部	12.51	8.11	2.78	軸	○	○	○	◇	—	—		S09K
		BC 平均	8.22	5.40	3.52									
112		C 胸部のみ	3.90	4.65	1.83	—	—	—	○	◎	—	—		S04C (05)
113		C 胸部のみ	4.81	4.43	—	—	—	—	○	◇?	—	—		S06I
114		C 胸部のみ	5.32	6.81	—	—	—	—	○	△?	—	—		S04C (05)
115		C 胸部のみ	5.35	5.72	—	—	—	—	○	△?	—	—		S06E
116		C 胸部のみ	5.79	5.63	—	—	—	—	○	◇	—	—		S06I

No.	図版 No.	部位	高さ	幅	厚さ (長さ)	冠部	頭部	顔凸	胸部	肩	脚部	台座	朱線	出土区
117		C 胸部のみ	5.92	6.85	2.28	—	—	—	○	◎	—	—		S04E
118		C 胸部のみ	7.63	5.69	—	—	—	—	○	△	—	—		S03w-G
		C 平均	6.17	5.97	2.28									
119		CD 胸・脚部	5.82	3.30	—	—	—	—	○	—	○	—		S06J
120		CD 胸・脚部	6.89	6.08	—	—	—	—	○	—	○	—		S07F
121		CD 胸・脚部	7.43	4.49	—	—	—	—	○	—	○	—		S08K
122		CD 胸・脚部	7.67	4.03	—	—	—	—	○	—	○	—		S05D
123		CD 胸・脚部	7.70	4.11	—	—	—	—	○	—	○	—		S07C
124		CD 胸・脚部	7.80	3.95	2.30	—	—	—	○	—	○	—		S09K
125		CD 胸・脚部	8.18	4.28	—	—	—	—	○	—	○	—		S07F
126		CD 胸・脚部	8.51	5.17	—	—	—	—	○	—	○	—		S04E
127		CD 胸・脚部	8.71	5.50	—	—	—	—	○	—	○	—		S07E
128		CD 胸・脚部	8.97	5.03	2.01	—	—	—	○	—	○	—		WestOKM
129	5-1	CD 胸・脚部	9.18	5.22	2.65	—	—	—	○	—	○	—		S09K
130		CD 胸・脚部	9.40	4.86	2.30	—	—	—	○	—	○	—		S04B
131		CD 胸・脚部	9.85	4.91	—	—	—	—	○	—	○	—		S06wJ
132		CD 胸・脚部	10.06	5.82	2.11	—	—	—	○	—	○	—	○ 4	表採
133		CD 胸・脚部	10.46	5.45	—	—	—	—	○	—	○	—		S08K
		CD 平均	8.44	4.81	2.27									
134		D 脚部のみ	4.13	3.18	1.50	—	—	—	—	—	○	—		S08K
135		D 脚部のみ	4.17	3.56	—	—	—	—	—	—	○	—		S05B
136		D 脚部のみ	5.22	4.33	2.00	—	—	—	—	—	○	—		S04B
137		D 脚部のみ	6.51	3.82	—	—	—	—	—	—	○	—		S07C
138	5-3	D 脚部のみ	6.51	4.27	1.98	—	—	—	—	—	○	△?	○ 2	S09K
139		D 脚部のみ	7.51	3.91	—	—	—	—	—	—	○	—		S07E
140	5-2	D 脚部のみ	8.30	5.13	2.28	—	—	—	—	—	○	—		S04E
		D 平均	6.05	4.03	1.94									
141		DE 脚・台座	2.91	2.54	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S06G
142		DE 脚・台座	2.97	3.74	4.58	—	—	—	—	—	○	凹?		S07E
143		DE 脚・台座	3.21	4.99	3.72	—	—	—	—	—	○	凹?	○ 1	S04B (05)
144		DE 脚・台座	3.27	3.38	4.31	—	—	—	—	—	○	△?		S07C
145		DE 脚・台座	3.41	3.75	5.55	—	—	—	—	—	○	△?		S07F
146		DE 脚・台座	3.85	3.80	4.13	—	—	—	—	—	○	△凹?		S04C (05)
147		DE 脚・台座	3.93	4.24	5.51	—	—	—	—	—	○	凹?		WestT37
148		DE 脚・台座	4.20	3.50	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S04C (05)
149		DE 脚・台座	4.21	3.41	—	—	—	—	—	—	○	△凹?		S04C
150		DE 脚・台座	4.37	3.51	4.56	—	—	—	—	—	○	△凹?		S04E
151		DE 脚・台座	4.55	4.53	5.35	—	—	—	—	—	○	凹?		S04B (05)
152		DE 脚・台座	4.55	5.11	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S06wJ
153		DE 脚・台座	4.59	3.98	5.88	—	—	—	—	—	○	凹?		S06E
154		DE 脚・台座	4.71	4.55	4.01	—	—	—	—	—	○	凹?		S06wJ
155		DE 脚・台座	4.71	4.75	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S06wJ
156		DE 脚・台座	4.71	4.80	5.68	—	—	—	—	—	○	凹?		S07E
157		DE 脚・台座	4.76	4.54	2.60	—	—	—	—	—	○	?		S09RoomJ
158		DE 脚・台座	4.95	3.89	3.66	—	—	—	—	—	○	?		S09K
159		DE 脚・台座	5.30	4.50	4.50	—	—	—	—	—	○	凹?	○ 1	S10L
160		DE 脚・台座	5.36	4.11	—	—	—	—	—	—	○	凹?		WestAB
161		DE 脚・台座	5.40	4.18	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S04E
162		DE 脚・台座	5.42	3.07	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S05C
163		DE 脚・台座	5.42	4.53	4.58	—	—	—	—	—	○	△?		S08K
164		DE 脚・台座	5.45	5.45	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S05C
165		DE 脚・台座	5.56	3.78	5.01	—	—	—	—	—	○	△凹?		S04E
166		DE 脚・台座	5.56	3.87	—	—	—	—	—	—	○	△凹?		S05C
167		DE 脚・台座	5.62	3.66	—	—	—	—	—	—	○	凹?		表採
168		DE 脚・台座	5.72	3.70	—	—	—	—	—	—	○	凹?		S04C
169	5-4	DE 脚・台座	5.76	4.92	5.79	—	—	—	—	—	○	凹?		S09K
170		DE 脚・台座	5.79	4.68	5.15	—	—	—	—	—	○	凹?		S06G
171		DE 脚・台座	5.80	4.34	—	—	—	—	—	—	○	△凹?		S07C
172		DE 脚・台座	5.80	4.30	4.50	—	—	—	—	—	○	凹?		WestT33

No.	図版 No.	部位	高さ	幅	厚さ (長さ)	冠部	頭部	顔凸	胸部	肩	脚部	台座	朱線	出土区
173		DE 脚・台座	6.00	4.00	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S03w-B
174		DE 脚・台座	6.00	4.31	3.33	—	—	—	—	—	○	凹？		S09D
175		DE 脚・台座	6.10	3.77	—	—	—	—	—	—	○	△？		S08K
176		DE 脚・台座	6.10	3.30	4.50	—	—	—	—	—	○	凹？		S10M
177		DE 脚・台座	6.24	4.21	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S06wJ
178	5-5	DE 脚・台座	6.24	3.72	4.35	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
179		DE 脚・台座	6.25	4.49	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S07E
180		DE 脚・台座	6.30	4.23	—	—	—	—	—	—	○	△？		S05C
181		DE 脚・台座	6.35	6.24	6.42	—	—	—	—	—	○	凹？		WestT26
182		DE 脚・台座	6.39	4.66	3.04	—	—	—	—	—	○	凹？		S06E
183		DE 脚・台座	6.44	6.17	6.65	—	—	—	—	—	○	凹？		WestOKM
184		DE 脚・台座	6.50	5.00	4.70	—	—	—	—	—	○	凹？		WestT33
185		DE 脚・台座	6.57	4.69	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S06D
186		DE 脚・台座	6.83	4.60	—	—	—	—	—	—	○	凹？		WestT26
187		DE 脚・台座	6.89	4.71	4.34	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
188		DE 脚・台座	6.90	4.80	5.40	—	—	—	—	—	○	凹？		WestT4
189		DE 脚・台座	6.90	5.20	5.60	—	—	—	—	—	○	△？	○ 2	S03e-B
190		DE 脚・台座	6.95	4.47	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S03w-C
191		DE 脚・台座	6.99	4.46	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S07C
192	5-6	DE 脚・台座	7.13	4.65	3.70	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
193		DE 脚・台座	7.15	4.15	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S03e-E
194		DE 脚・台座	7.16	5.15	—	—	—	—	—	—	○	△凹？		S05B
195		DE 脚・台座	7.18	3.65	—	—	—	—	—	—	○	△？		S03e-E
196		DE 脚・台座	7.30	4.76	—	—	—	—	—	—	○	△凹？		S07E
197		DE 脚・台座	7.32	4.69	5.00	—	—	—	—	—	○	凹？	○ 2	S04B
198		DE 脚・台座	7.50	4.80	5.00	—	—	—	—	—	○	凹？		S10L
199		DE 脚・台座	7.66	5.03	3.75	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
200		DE 脚・台座	8.06	4.86	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S08K
201		DE 脚・台座	8.08	4.16	—	—	—	—	—	—	○	凹？		S03e-E
202		DE 脚・台座	8.34	4.03	4.41	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
203		DE 脚・台座	8.34	4.62	4.06	—	—	—	—	—	○	凹？		S09K
204		DE 脚・台座	8.47	4.43	4.59	—	—	—	—	—	○	—		S06I
205		DE 脚・台座	8.70	5.02	2.21	—	—	—	—	—	○	凹？		S09D
		DE 平均	6.88	4.57	4.59									
206		E 台座のみ	2.02	3.63	—	—	—	—	—	—	—	凹？		S06I
207		E 台座のみ	2.02	4.11	4.66	—	—	—	—	—	—	凹		S07C
208		E 台座のみ	2.09	3.95	4.29	—	—	—	—	—	—	凹		S08K
209		E 台座のみ	2.21	3.29	5.07	—	—	—	—	—	—	凹		S04B (05)
210	5-14	E 台座のみ	2.25	3.26	3.29	—	—	—	—	—	—	△		S09K
211		E 台座のみ	2.32	4.42	4.48	—	—	—	—	—	—	凹		S07F
212	5-9	E 台座のみ	2.41	5.96	6.49	—	—	—	—	—	—	凹		S06E
213		E 台座のみ	2.43	3.06	2.31	—	—	—	—	—	—	△		S08K
214		E 台座のみ	2.63	4.92	6.02	—	—	—	—	—	—	凹		S06I
215		E 台座のみ	2.77	5.27	5.98	—	—	—	—	—	—	凹		S04C (05)
216	5-10	E 台座のみ	2.80	5.30	6.10	—	—	—	—	—	—	凹		S10M
217	5-8	E 台座のみ	2.81	4.26	4.74	—	—	—	—	—	—	凹		S09K
218		E 台座のみ	2.95	4.07	4.95	—	—	—	—	—	—	凹		S06E
219	5-7	E 台座のみ	2.96	3.94	5.61	—	—	—	—	—	—	凹		S09K
220		E 台座のみ	2.97	3.27	5.42	—	—	—	—	—	—	凹？		S04B (05)
221		E 台座のみ	2.99	4.13	5.01	—	—	—	—	—	—	凹？		S09K
222		E 台座のみ	3.00	5.10	5.70	—	—	—	—	—	—	凹？		S10L
223		E 台座のみ	3.14	4.74	5.60	—	—	—	—	—	—	凹		WestT24
224		E 台座のみ	3.23	5.13	4.41	—	—	—	—	—	—	△		S04C (05)
225		E 台座のみ	3.24	4.07	4.80	—	—	—	—	—	—	△		S04E
226	5-13	E 台座のみ	3.26	3.73	3.96	—	—	—	—	—	—	△		S09K
227	5-12	E 台座のみ	3.30	4.20	2.50	—	—	—	—	—	—	△		S10L
228	5-11	E 台座のみ	3.30	4.00	5.00	—	—	—	—	—	—	△凹		S10M
229		E 台座のみ	3.38	3.58	4.00	—	—	—	—	—	—	△凹		S07C
230		E 台座のみ	3.51	3.28	4.11	—	—	—	—	—	—	△凹		S07C
231		E 台座のみ	3.51	4.18	5.90	—	—	—	—	—	—	△？		S09K
232		E 台座のみ	3.55	4.16	4.90	—	—	—	—	—	—	凹？		S04E

No.	図版 No.	部位	高さ	幅	厚さ (長さ)	冠部	頭部	顔凸	胸部	肩	脚部	台座	朱線	出土区
233		E 台座のみ	3.90	4.10	5.34	—	—	—	—	—	—	凹		S05C
234		E 台座のみ	4.06	4.86	7.27	—	—	—	—	—	—	凹		S08K
235		E 台座のみ	4.29	5.35	—	—	—	—	—	—	—	△?		S06wG-J
236		E 台座のみ	4.47	4.06	3.89	—	—	—	—	—	—	凹?		S09K
		E 平均	3.73	4.18	4.77									
237		F 頭～脚部	7.14	4.37	—	凹	○	×	○	△	○	—		S03e-I
238		F 頭～脚部	7.48	4.37	—	×	○	×	○	△	○	—		S04C
239		F 頭～脚部	7.51	4.92	—	×	○	○	○	◎	○	—	○ 2	S04C (05)
240		F 頭～脚部	7.71	4.86	—	凹	○	○	○	◇	○	—	○ 1	S06E
241		F 頭～脚部	7.74	4.46	—	凹	○	○	○	◎△	○	—		S07D
242		F 頭～脚部	8.33	4.59	—	軸	○	○	○	◎	○	—		S06J
243	3-14	F 頭～脚部	8.75	4.89	2.78	軸	○	×	○	◎	○	—	○ 2	S09K
244		F 頭～脚部	8.87	4.82	—	凹	○	×	○	◎△	○	—		S07C
245		F 頭～脚部	8.89	5.88	—	×	○	○	○	◇	○	—		West
246		F 頭～脚部	8.90	4.50	2.30	軸	○	×	○	◎	○	—		S1oL
247		F 頭～脚部	8.98	5.12	—	×	○	×	○	◎△	○	—		S07C
248	3-13	F 頭～脚部	9.11	5.47	4.10	軸	○	○	○	◎	○	—	○ 3	S05D
249		F 頭～脚部	9.55	5.19	2.21	軸	○	○	○	△◎	○	—		S09K
250	3-12	F 頭～脚部	9.57	5.48	2.50	凹	○	×	○	*	○	—		S09K
251		F 頭～脚部	9.65	4.45	—	×	○	○	○	◇	○	—		S06I
252		F 頭～脚部	9.68	4.79	—	軸	○	○	○	◎△	○	—		S04B (05)
253		F 頭～脚部	9.68	4.87	—	凹	○	○	○	△	○	—		S08K
254	3-11	F 頭～脚部	9.70	6.00	3.60	軸	○	○	○	◇	○	—	○ 3	S10L
255		F 頭～脚部	9.76	5.04	—	軸	○	○	○	◎	○	—		S07B
256		F 頭～脚部	9.80	4.28	—	凹	○	○	○	△	○	—		S07C
257		F 頭～脚部	9.97	5.38	—	軸	○	○	○	△	○	—		S06wJ
258		F 頭～脚部	10.17	4.44	—	軸	○	○	○	◎	○	—		S07C
259		F 頭～脚部	10.18	5.67	—	軸	○	○	○	◎	○	—		S07C
260		F 頭～脚部	10.70	4.93	—	凹	○	○	○	△	○	—		S07F
261	3-15	F 頭～脚部	10.70	6.90	4.10	軸	○	○	○	◎	○	—		S03w-E
262	3-10	F 頭～脚部	10.77	5.24	3.69	軸	○	○	○	◇	○	—		S02H
263	3-9	F 頭～脚部	10.88	4.41	3.11	軸	○	○	○	◎	○	—		S09K
264	3-8	F 頭～脚部	11.00	5.92	2.10	×	○	×	○	△	○	—		S06F
265	3-7	F 頭～脚部	11.30	5.70	5.40	×	○	○	○	△	○	—	○ 4	S04C (05)
266		F 頭～脚部	11.44	5.20	—	軸	○	○	○	△	○	—		S08K
267	3-6	F 頭～脚部	12.30	5.76	5.57	軸	○	○	○	△◎	○	—		S04E
		F 平均	9.56	5.09	3.46									
268		G ほぼ完形	8.31	4.74	3.06	凹	○	○	○	◇	○	凹?		S03w-I
269		G ほぼ完形	11.60	5.24	—	軸	○	○	○	◎◇	○	△凹?		S07C
270	3-5	G ほぼ完形	12.20	5.00	4.60	軸	○	○	○	◎	○	△?		S05B
271	3-3	G ほぼ完形	12.43	5.58	4.33	軸	○	○	○	△	○	△凹?		S09K
272		G ほぼ完形	13.00	5.24	—	軸	○	○	○	◎	○	凹?		S07C
273	3-4	G ほぼ完形	13.00	5.55	3.95	軸	○	○	○	△◎	○	凹?	○ 2	S03e-E
274	3-2	G ほぼ完形	13.62	5.31	5.28	×	○	○	○	◎?	○	凹?		WestOKM
275	3-1	G ほぼ完形	14.80	6.60	6.40	凹	○	○	○	◎	○	凹?		S03e-F
		G 平均	12.37	5.41	4.60									

※「部位」のアルファベットは図1の部位呼称模式図に対応。

※「頭部」「顔凸（前方への飛び出し）」「胸部」「脚部」の有無を○×で表わす。

※「肩」は、「隅丸」タイプを◎、「なで肩」タイプを△、「いかり肩」タイプを◇で表わす。

※「台座」は、胴体部を台座部の凹状の窪みに挿し込むタイプを凹、胴体部の後面に添わせるタイプを△で表わす。

※「朱線」があるもののみに○。数字は朱線の本数を表わす。

※「出土区」のSは南地区、Westは西地区を表わす。数字は調査年。続くアルファベットはエリア名を表わす。

※いずれも、遺存しておらず計測または観察ができないものは—で表わす。

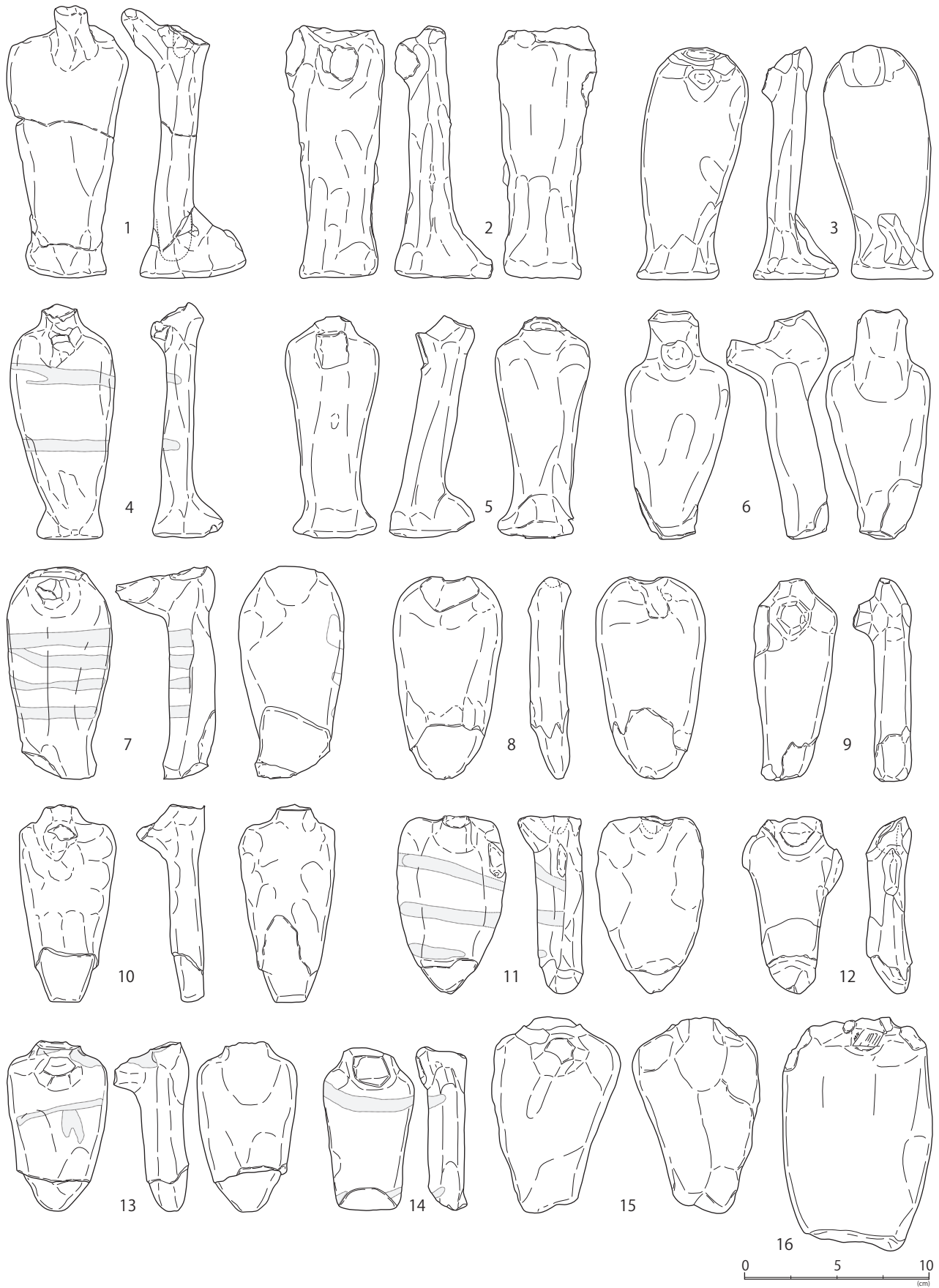


図3 アコリス遺跡出土コブラ形土製品 (1)



図4 アコリス遺跡出土コブラ形土製品 (2)

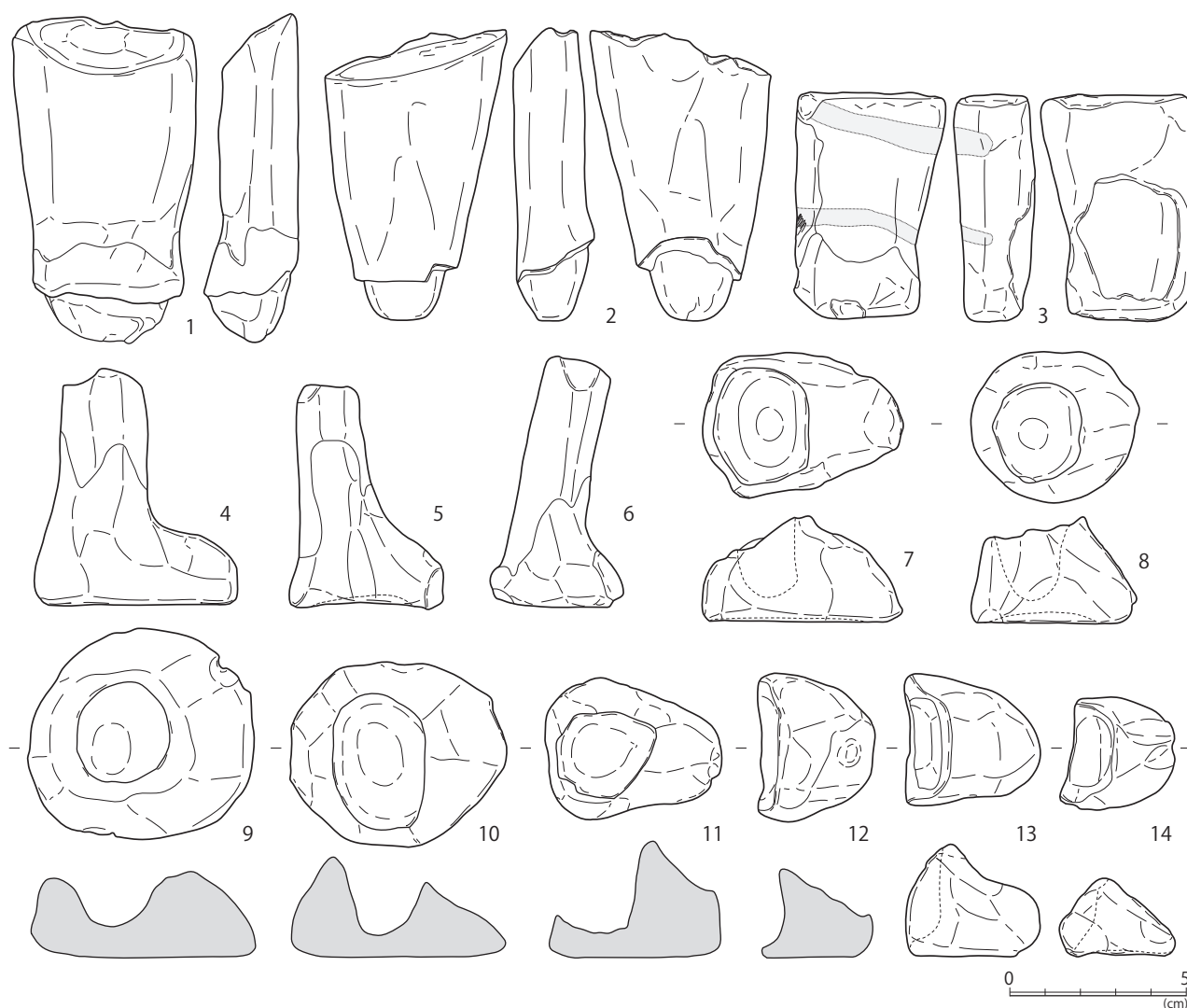


図5 アコリス遺跡出土コブラ形土製品 (3)

7点の平均の幅が4.0cmであり、胸部から脚部にかけて先細りしていることが分かるだろう(図3-10; 図5-2)。また、顔部を含めない胸部や脚部の厚さは2cm前後であり、滑らかに丸みを帯びた側面の形状とあわせて、類例と同じ様相をみせている。ところが、台座部は類例よりも小さい傾向がみられる。台座部のみが残るE:31点の平均値は高さ3.0cm、幅4.2cm、長さ(奥行)4.9cmである。特に長さ(奥行)が類例よりも短く、長さ6~10cmであったコム・ラビーア遺跡出土例に比べるとその差が顕著である。短く、厚みのあるコム・フィリン遺跡出土例の形状に近いといえよう。

頭部の上端に付く冠部(頭飾り)は類例ではほとんどみられなかった装飾であり、アコリス遺跡出土のコブラ形土製品の大きな特徴となっている。頭飾りは別作りされ、頭部上端(頭頂部)の凹状の窪みに挿し込まれている。頭部が遺存する146点のうち、軸などの頭飾りの一部が確認できる例が96点(図3-4; 図4-3)、頭頂部が凹状に窪んでいる

例が33点を数える(図3-11; 図4-4)。残り17点は残存状態が悪く、頭飾りの有無が確認できない状態であるが、本来はすべての製品が頭飾りを持っていたと考えて問題はないだろう。

頭飾り本体は円柱または楕円柱状の軸から延びるが、いずれも破損しているため、本体の形状は不明である。古代エジプトの神々は個別の頭飾りを持っており、神を特定する手がかりともなっている。その代表的なモチーフとして、日輪や羽毛や角などが挙げられる¹⁹⁾。コブラ形土製品のわずかに残る頭飾り本体の下端部を注意深く観察すると、端部が真っ直ぐに立ちあがる傾向にあることから、円形の日輪や外側に広がる角ではなく、長方形に近い形状の羽毛飾りであった可能性が高いのではないだろうか(図4-2, 3)。2本の羽毛飾りを頭上に戴いたコブラ形の木製品が出土していることも考慮すべき点である²⁰⁾。なお、コブラ形土製品の頭頂部に挿し込んだ頭飾りの軸の周りには粘土が巻いてある。巻く際に後面を厚くし、後頭部のような丸みを帯

びた形状に整形している(図3-6; 図4-8)。

彩色された製品は20点を数え、いずれも朱色で水平線を引いてある。朱線の数は1本から4本で、引いた場所は19点が胸部から台座にかけての前面のみ(図3-7, 11; 図5-3)、1点だけが前面から後面に延びている(図4-4)。

類例にみられ、アコリス遺跡出土品にない装飾は、胴体部前面に付く細長い粘土塊である。これは「供物台」や「ミニチュアコブラ」や「胸」と呼ばれ、類例では外見上の特徴のひとつに挙げることができる。しかし、アコリス遺跡では同様の粘土塊を持つ製品は知られていない。ただし、小さな円形の粘土塊が付いた製品が1点だけ出土している(図4-11)。拙稿において、同様の粘土塊を貼り付けた土製のヒト形小像が60点ほど出土していることを報告している(花坂2009)²¹⁾。これは手捏ねの粗雑品であり、水平に引かれた朱線を持ち、出土遺構が多様であり特定の個所に集中しない点など、コブラ形土製品と共通する特徴を多く持っているため、今後は両者の関係性を考える必要があるだろう。

前方に飛び出した顔部が遺存する130点のうち、眼が付いている例はわずかに4点で、いずれも小さな粘土を貼り付けて眼を作っている(図4-6, 7)²²⁾。ほとんどのコブラ形製品で眼を貼り付けた痕跡がないことから、当初から眼を表現する意図はなかったと思われる。

最後に製作技法に関して、類例と同様にアコリス遺跡出土品もまた、胴体部と台座部を別作りにしている。接合部分を新しい粘土で覆い、指で押圧して整形している。その際に接合部分だけでなく、胴体部や台座部などの表面にも粘土を塗布し、全体の形状を整えている(図3-1, 図5-4)。台座部から外れた脚部先端を観察すると、芯のように残る部分と後に塗布した粘土との間にわずかな段差ができてることからも、こうした製作技法が窺える(図5-2)。また、他遺跡では台座部上面に粘土ヒモを貼り付けた尾部を表現した例が多いが、アコリス遺跡の出土品ではみられない。

コブラ形土製品のほとんどが破片で出土し、古代エジプトではモノを破壊することで災いを避けようとする呪術があることから(Ritner 1997: 148; Shaw and Nicholson 2008: 109-110, 187-188)、意図的に破壊して廃棄した可能性が指摘されている(Spencer 2008: 66)。しかし、アコリス遺跡出土品に関する限り、意図的に破壊した痕跡はない。破損箇所をみると、突き出した顔部や長い胴体部や、頭飾りと頭頂部または脚部と台座部の挿し込み接合箇所である。これらは力が加わり易く、壊れ易い部分であるから、したがって、破損はすべて自然な現象の結果であろう。

4. 型式分類に向けて

型式分類を行うための属性の1つとして、コブラ形土製

品の「肩」に当たる部分、つまり本物のコブラの部位でいうとフード(頸部)の湾曲度が挙げられる。コブラ形土製品を正面から見た場合、隅丸の角を持つ「隅丸肩◎」タイプが69点(図3-1, 5)、肩全体が丸みを帯びた「なで肩△」タイプが40点(図3-3, 7)、肩がほぼ水平に張り出し、角ばった「いかり方」タイプが20点である(図3-10, 11)²³⁾。しかし、「隅丸肩◎」と「なで肩△」の違いをラインの角度などの数値で明確に定義することは難しく、さらに、各種の形状が左右の肩で別々にみられる例もある(図4-5)。

また、頭部(顔部)の作り方も製品によって多少の差異が認められる。今度は製品を側面から見ると、肩から頭部に至るラインが緩やかに弧を描きながら前傾しているタイプと、真っ直ぐに立ちあがっているタイプに分けることができる。前者は胴体部の上端を前方に折り曲げ、粘土を加えて顔部を作っており(図4-12)、この製作技法は他遺跡の類例に多くみられる。しかし、アコリス遺跡出土品では後者の胴体部側面のラインが真っ直ぐ立ちあがっていることが多い。そのなかで、顔部が肩の上端ラインよりも高い位置に付いている例と、低い位置についている例に細分することが可能かもしれない。顔部が高い位置に付いている場合、胴体部上端の中央付近を少しだけ前傾させることで顔部を作りだし(図3-6)、低い位置についている場合には粘土を貼り付けていると思われる(図3-2)。

胴体部の水平断面の形状の違いも指摘できるだろう。ほとんどの製品は隅丸の長方形と呼べる断面をみせ、前面と後面はフラットになっている。一方で、数は多くはないが、胴体部両端の幅が狭く、前面と後面の中央部分が少し盛りあがったレンズ状の断面を持つタイプもある。

脚部と台座部の接合方法には2種類が認められ、それは台座の形状によって異なっている。1つは台座部の凹状の窪みに胴体部を挿し込むタイプ(表中の凹)であり(図5-8)、もう1つは胴体部を後ろから支えるようにして、台座部を後面に添わせるタイプ(表中の△)である(図5-14)。台座部だけが遺存しているE: 31点のうち、凹状の窪みを持つ例が20点、後面に添わせる三角柱状の例が8点となっている。前者は長さの平均値が5.3cmをはかるのに対し、後者は3.9cmと小さく、凹状の窪みを持つ台座部のほうが大きく、安定感のある作りとなっている。残る3点は凹状と三角柱状の中間形態をとる。

台座部の水平底面の形状は、凹状の窪みを持つタイプは隅丸方形、隅丸台形、長楕円であり、一方の後面から支えるタイプは半円または隅丸三角形に近い形状となっている。底面は概ね平坦に仕上げているが、設置のための安定性を第一に考えて調整しておらず、かろうじて自立できる程度の不安定な製品も少なくない。

IV. コブラ形土製品の性格と機能

1. コブラ形土製品の諸問題

コブラ形土製品が持つ属性を改めて振り返ってみる。土製品の帰属年代の中心は新王国時代第19、20王朝にあると思われる。これまでの出土例から、その初現を仮に第18王朝のアマルナ期（前14世紀中頃）とし、終焉が第3中間期初頭（前10世紀頃）とすれば、土製品が作られた期間は400年ほどになる。また、エジプト国内に留まらずレヴァント地方からも出土し、広範囲に分布する製品である。このような時間的・空間的な広がりを持つ土製品であるが、これらを越えた共通性も認められる。

丸みを帯びた肩部・胸部から脚部にかけて先細りする胴体部を持ち、上体が起立した姿はコブラ形土製品に共通する形態である。しかし、これらはエジプトコブラの身体的な特徴であり、エジプトコブラをモチーフにした図像や装飾品の多くに共通する点であるため、土製品特有のものとはいえない。そこで土製品の大きさに眼を転じると、台座部を含む高さが12～15cm、幅が6～8cmほどの近似した値に還元される。また、いずれも手捏ねの粗雑な作りとなっている。特に胴体部と台座部の接合方法についてみると、中部エジプトのアコリス遺跡、デルタ地帯とナイル河谷の境界に位置するコム・ラビーア遺跡、レヴァント地方のベト・シャン遺跡という、遠く離れた遺跡からの出土品で共通性がみられる。これは土製品が現地で製作されたのか、それとも完成品として運ばれたのかという、伝播・拡散の問題を考える上でもおおいに注目される。

一方で、頭頂部の頭飾りや「供物台」や「ミニチュアコブラ」と呼ばれる粘土塊、台座部上面の尾部の有無など、細部の表現方法には違いが認められる。これらの装飾の有無は同一遺跡内でもみられることから、地域的な差異ではなく、製品の多様性と捉えるべきであろう。時代差と見做すこともできるが、現段階では製品の出土コンテキストの情報が少なく、編年を組むまでには至っていない。今後は同時代における、ナイル河谷、デルタ地帯、レヴァント地方の出土土器との形状の違いや、用いられる粘土の比較などを行いながら、土製品の差異をみていく必要があるだろう。

続いて出土遺跡を通覧すると、ナイル河谷の遺跡よりも、デルタ地帯からレヴァント地方にかけて多く分布していることが目を引く。当該期はレヴァント方面や西方のリビアとの関係が重要視され、デルタ地帯が政治・経済・外交の中心となった時期である。軍事拠点となる要塞都市も多数建設されたが、これらの都市が同時に交易の拠点であったことも十分に考えられる。いきおい、コブラ形土製品の出土遺跡も政治・軍事・交易の拠点地域に集中しているのだろう。前述したように、要塞や駐屯地であった遺跡から数

多く出土することから、コブラ形土製品が軍隊やその家族によって用いられた可能性が指摘されている（Szpakowska 2003: 118）。しかし、この指摘はすべての事例を説明できるものではなく、出土遺跡の性格と土製品の用途や機能を結び付けるには、出土遺跡の絶対数が少ないことは否めない。

遺跡内における出土遺構をみていくと、公的な政府関連施設や神殿からの出土ではなく、一般の居住域から出土していることが報告されている（Borchardt and Ricke 1980; Stevens 2006; Spencer 2008; David 2009）。コム・フィリン遺跡の報告書では「遺跡のいたるところで出土する」という印象が述べられており（Spencer 2008: 64）、アコリス遺跡の西地区や南地区の出土遺構の多様性も上述した通りである。そこで、コブラ形土製品が比定される神や機能について、土製品の形態的特徴やアコリス遺跡における出土地点の多様性に注目しながら考察していく。

2. 形態的特徴からの検討

コブラ形土製品の形態的特徴は述べてきた通りだが、そこから特定の神と見做す手がかりを得られるかみていくことにしよう。

絶対数は多くないが、小さな粘土塊を胴体部に貼り付けた例が各地にみられる。これらはコブラ形土製品の「最も目を引く特徴」とも言われる（Szpakowska 2003: 118）。なお、アコリス遺跡では1点も出土例がないことは留意する必要がある。粘土塊はいずれの場合も胴体部前面に貼り付けられ、中央に1つあるものを「供物台」、左右に2つ並ぶものを「ミニチュアコブラ」と見做している。「供物台」の両脇に「ミニチュアコブラ」が並ぶ例もある（CoA I 1923: pl. XXIII-5）。「ミニチュアコブラ」との関係性が指摘される遺物に、英国・ピートリ博物館所蔵の石灰岩製ステラ片（UC14439）がある（Szpakowska 2003: 119; Stevens 2006: 103）²⁴。このステラ片にはヒエログリフ銘文とともに、長い胴体を上下に波打ったコブラの姿で表されるメルトセゲル女神が刻まれている。その前方には小さな2匹のコブラ（ヘビ）が立ち上がっており、これをコブラ形土製品の「ミニチュアコブラ」と重ね見ている。

また、アコリス遺跡出土品の特徴であり、他の類例にほとんどみられない装飾として冠部（頭飾り）が挙げられる。管見によれば、他例ではコム・フィリン遺跡の1点を除き知られていない（F755/British Museum 2008: pl. 41）。これらの頭飾りが2本の羽毛飾りであったとすれば、どの神に比定できるだろうか。前述のピートリ博物館所蔵ステラ片に刻まれたメルトセゲル女神は2本の羽毛飾りを戴いているが、通常、メルトセゲル女神は日輪と角を戴く場合が多いという。また、レネヌテト女神は日輪と角、ときには

日輪の上に2本の羽毛飾りを持っていた (Wilkinson 2003: 225)。2本の羽毛飾りを持つ姿で表わされる神は多く、神を特定する手がかりとは成りえない。

その他の外見的な特徴として、胴体部前面に引かれた朱線が挙げられる。古代エジプトにおける「赤」の色に込めた象徴的意味はしばしば論じられるところである²⁵⁾。何らかの宗教的、呪術的な意味を込めた装飾である可能性は捨てきれないが、アコリス遺跡出土品で朱線を持つ例は20点しかなく、その他の遺跡においても出土数は少ない。このことから、朱線が必ずしもコブラ形土製品の果たす機能や役割に不可欠なものとは言えないだろう。同様に、上述した小さな粘土塊や頭飾りも、コブラ形土製品の持つ機能や性格を表し、神を特定する手がかりに直結するとは考えにくい。

3. 比定される神々

コブラの姿で表される古代エジプトの神々は複数存在しており、古くから信仰を集め、王権のモチーフとしてもウラエウスやウアジェトが良く知られている (Johnson 1990)。呪術文書に「4体の土製のウラエウス像を寝室の四隅に安置すると、悪夢や悪疫から身を守ることができる」と書かれていることから、コブラ形土製品はウラエウスを表している可能性が指摘されている (Ritner 1990; Ritner 2008: 186; Spencer 2008)²⁶⁾。残念なことに、いずれの遺跡においても原位置を保って出土した例はなく、設置場所の詳細は不明である。L. ボルヒャルト (Borchardt) らのテル・エル＝アマルナ遺跡の発掘報告書では、各住居の出土品リストに「土製のウラエウス」とある。しかし、ウラエウスと記しているものの「家庭の神 Hausgott」との注意書きを加えており、土製品にウラエウスの権能を重ねているわけではないことが窺える (Borchardt and Ricke 1980: 32 ほか)。

また、ウアジェトは上体を起こした攻撃姿勢のコブラの姿で描かれ、戦争に関する碑文では、炎の息で敵を倒し、王を守るとされる。その信仰の中心地はデルタ北西部にあったという (Wilkinson 2003: 226-228)。出土地がデルタ地帯の軍事的な施設が置かれていた遺跡に多く、当該期の首都がデルタ地帯にあったことなどを勘案すると、土製品がウアジェトの性格や機能を反映している可能性も十分に考えられるだろう。

しかし、王権と結び付きの強いウラエウスやウアジェトと解釈することはほとんどなく、これまでの研究ではメレトセゲル女神やレネヌテト女神と見做す傾向にある (Giddy 1999; Szpakowska 2003; Stevens 2006; Spencer 2008 など)。

メレトセゲル女神は「沈黙を愛する女」と呼ばれ、テー

ベの墓域を守る神として信仰された。特にデイル・エル＝メディーナで崇拜を集め、コブラの頭を持つメルトセゲル女神を描いた奉納石碑が数多く出土している (Wilkinson 2003: 224; Shaw and Nicholson 2008: 205)。しかし、先述したように、当遺跡からコブラ形土製品の出土は管見の限りでは知られていない。

コブラ形土製品が比定される最も可能性が高い神はレネヌテト女神であろう。ファイユーム地方のメディネット・マアディ (Medinet Maadi) で崇拜が盛んであり、中王国時代第12王朝のアメンエムハト3世と4世治世にはレネヌテト女神を祀る神殿が建てられた (Shaw and Nicholson 2008: 198-199)。

この女神は「肥沃な大地の女主人」や「穀物倉庫の女主人」といった称号を持つ、穀物の豊穡を掌る女神とされる。それと同時に「子供の養育者」でもあった (Wilkinson 2003: 225; 内田 2004: 43; Shaw and Nicholson 2008: 274; Ritner 2008: 186)。古代エジプトの神話では、穀物や家畜の豊穡はオシリス神やゲブ神などの男神と結び付き、ハトホル女神やイシス女神などの女神が出産や子供の育成と関連している。したがって、レネヌテト女神は男女神両方の属性を併せ持っていることになる (Pinch 2006: 120)。また、レネヌテト女神は王が身につける麻布の服の守護女神として、ミイラの包帯の供給に関わりを持つとされることもあった (Shaw and Nicholson 2008: 274)。

アコリス遺跡南地区は手工業生産の工房域であったと同時に、一般住居地に隣接して円形の穀物倉庫址が数多く検出されている。こうした状況から、アコリス遺跡出土のコブラ形土製品に比定される神はレネヌテト女神だと解釈するのは自然なことであろう。グレコ・ローマン時代のアコリス遺跡における信仰を取り上げた論考で、山花はコブラ形土製品がレネヌテト女神を表し、最終的にはイシス女神に収斂される、豊穡を属性とする神々への信仰があったと述べている (山花 2003: 71)。レネヌテト女神はアコリスの都市神であったワニの姿をしたソベク神とも深いつながりを持つので²⁷⁾、アコリス遺跡出土のコブラ形土製品が表す神の姿の有力候補として挙げられるかもしれない。

4. 不特定な崇拜対象としてのコブラ形土製品

ここまでコブラ形土製品が比定される神を探ってきた。しかし、コブラの姿で表される神が複数存在するなかで、土製品を特定の神に比定することがそもそも可能であるのかどうか、という疑問が生じる。古代エジプトの神々は個別の権能を有する一方、他の神と習合することで、時代や地域によって属性や役割が変化することは珍しくないからである。女神の多くが「母性」や「誕生」や「豊饒」などの共通した属性を持っているため、同一視されたり、属性

が加えられることはしばしば起こった。土製品をある神（女神）と比定する一方で、特定の神性を見出さず、広義の悪夢除け、厄除けに用いられた製品と見做すことは、先行研究が指摘しているところでもある（Giddy 1999; Szpakowska 2003; Stevens 2006; Spencer 2008; Ritner 2008）。たとえば、人間に害を与えるコブラやサソリなどの毒性を持つ生き物は、壁に描かれたり、寝台の脚部に装飾するなどして、家庭を守るものとして扱われることも多かったという（Quirke 1992: 116-120; Ritner 2008: 186）。このことから土製品が厄除けとして用いられていた可能性が察せられる。

コム・ラビーア遺跡の報告書ではレネヌト女神に比定できることを指摘している。しかし、その指摘の以前に、コブラ形土製品は「ローカルな家庭内で崇拝されたもの local Egyptian household deity」を表していると解釈することが可能であり、「共感 sympathetic（呪術）」によって厄災から身を守るためのものである、と述べている（Giddy 1999: 18-19）²⁸⁾。古代エジプトの信仰は呪術的な要素が多くみられ、宗教と呪術の区別は厳密ではなかったと言われており（Ritner 1997; Shaw and Nicholson 2008: 187-188）、豊饒や妊娠・出産の願いを込めた呪術的な女性像が先王朝時代から存在している（Ucko 1968; Capel et al. 1996 など）。テル・エル＝アマルナ遺跡やコム・ラビーア遺跡でも同様の女性像が数多く出土しており、コブラ形土製品との関連性が示唆されている（Giddy 1999: 28-42; Stevens 2006: 85-89; Horbury 2009: 53-56）。

コブラ形土製品は、副葬品や護符に使用されるファイアンズやガラスではなく、日用土器と同じと思われる粘土で製作されている。その製作技法も手捏ねの粗雑品であり、装飾や形態的な表現方法も画一的ではないため、特定の神を表すための規格性を持って製作されたとは考えにくい。これらのことは、神官や役人などの支配者層ではなく、一般庶民の求めに応じるために製作されたことを窺わせる。使用した場所も神殿域ではなく、一般の居住域であることは各遺跡の発掘調査の結果が物語っているし、アコリス遺跡においても例外ではない。

アコリス遺跡の出土地点をみると、墓域としてだけでなく、信仰や祭祀の場として再利用されていた西地区から27点のコブラ形土製品が出土している。さらに、250点近くの土製品が出土している南区では、一般住居址、円形倉庫址、道路址など様々な遺構から出土している。これは家族や家庭の繁栄や安寧を願って住居内に安置することもあれば、穀物の豊穰を願って円形倉庫の傍に置くなど、その使用場面が一樣ではなかったことを示している。複数の使用場面が想定されるならば、ある特定の神と見做して解釈を与えるよりも、機能や性格が状況に応じて変化するもの

と捉えたほうが良いだろう。候補として挙がる神々の権能を総合してみると、穀物の豊穰、子供の安全な誕生や育成、家族の健康、厄除けなどが挙げられる。コブラ形土製品は固定された機能を持たず、一般庶民の日常の出来事に対する現世利益的な願いを込めて製作され、呪術的に用いられたのではないだろうか。

コブラ形土製品が流行した時代の古代エジプトの信仰や宗教を国家規模でみた場合、新王国時代は大規模な神殿が数多く建造され、王からの寄進を受けて肥大した神殿を管理する神官団が大きな影響力を持ったことが知られている。続く第3中間期の第21王朝はデルタ地帯のタニス（Tanis）を拠点に統治したが、同時にテーベのアメン神官団の勢力がファイユームの南側からアスワンに至る広い範囲を実質的に支配し続けた。また、第22、23王朝下におけるリビア人の支配層は、婚姻関係によって在地勢力である神殿機構を中央に取り込み、神殿を中心とした地方行政と並存する支配体制を構築したと論じられている（藤井2008）。新王国時代はもちろん第3中間期においても、神殿は国家規模の信仰において重要な役割を果たしており、神々に対する信仰は変わらずに盛んであっただろう。このような時代にあっても、民衆にとっては王朝が奉持するような神々に依拠するよりも、現世利益的な自分たちの願いが叶うことこそが大切であったのである²⁹⁾。

謝辞

本稿を草するにあたり、英国・スウォンジー大学のシュパコウスカ女史から数多くの有益な情報と刺激を頂戴いたしました。また、平素よりアコリス遺跡調査隊、筑波大学の関係者の皆様には大変お世話になっており、末筆ながら記して感謝いたします。なお、本稿ではアコリス遺跡の発掘調査における未公表資料を用いていますが、考察内容等に関しては調査隊の見解ではなく、筆者個人のものであり、文責は筆者にあることを申し添えます。

註

- 1) 2011年2月に交わしたシュパコウスカ女史との私信による。データベース作成は彼女が英国学士院（British Academy）の援助を受けて行っている *Clay Cobra Figurines of Ancient Egypt and the Levant* プロジェクトの一環である。
- 2) シュパコウスカ女史によれば、これらの遺跡に加えファイユーム地域のグロブ（Gurob）遺跡からも出土している可能性があるという（2011年2月に交わした私信による）。アビドスはソハーグの南50kmに位置し、現時点におけるコブラ形土製品が出土する最南端の遺跡である。サッカラはギザの南17kmほどに位置し、古王国時代の階段ピラミッドで有名だが、新王国時代の貴族の墓地も数多く作られている。テル・アブカーインはコム・フィリン北方のデルタ地帯西部に位置し、ラムセス2世治世に置かれた要塞の1つ。サイスはデルタ地帯西部に位置し、第24王朝および26王朝の王都。ザウイヤト・ウンム・エル＝ラハムはエジプト西部、アレキサンドリアから300kmほど西にいった東地中海沿岸に位置し、ラムセス2世治世に置かれた要塞の1つ。カンティールはデルタ地帯東部に位置し、古代名をピラメセス

- (Piramesse) といい、第19王朝のラムセス2世治世に王都。テル・エル＝ボルグはデルタ地帯東部、スエズ運河の東側に位置する要塞都市。アマルナ期にはすでに要塞が作られていたという。ハルバはシナイ半島北部に位置し、新王国時代に軍事要塞と在外センターが置かれた。カミッド・エル＝ロズは現在のレバノン共和国に位置し、古代名は *Kamidi* であり、アマルナ書簡 (EA194-198) の発信地となっている (池田 2007: 97)。
- 3) テル・エル＝アマルナ遺跡に残る市街址はナイル河に沿って南北 6km、東西 1km ほどの範囲で広がっている。北から North City、North Palace、North Suburb、Central City、Main City、South Suburb と呼称される。東部の岩丘には岩窟墓や採石場が存在し、市街地と岩丘の間に広がる低地砂漠に Workmen's Village などがある (Amarna Project HP 参照。URL: http://www.amarnaproject.com/pages/amarna_the_place/ 2011 年 2 月 13 日確認)。
 - 4) コブラボウルは Workmen's Village と Main City から出土している (Kemp 1981; Rose 2007: 70, 210-211)。コブラボウルの機能については「夜の悪霊から家庭を守るための儀礼に使われた」と、Amarna Project の HP に記載されている (参照 URL: http://www.amarnaproject.com/pages/recent_projects/material_culture/new_kingdom.shtml 2011 年 2 月 13 日確認)。また、コム・ラビーア遺跡や (Jeffreys et al. 1986: 7)、デイル・エル＝メディーナ遺跡、カンティール遺跡でも出土している可能性が指摘されている (Rose 2007: 70)。
 - 5) シュパコウスカは細長い突起物を「elongated bowl or miniature offering stand」としている (Szpakowska 2003: 118)。ステイーブンスはこれらを「Clay appliqué」と呼び、「tall potstand or altar」を示しているとする (Stevens 2006: 100)。
 - 6) コム・ラビーア遺跡はメンフィス地域の一画、プタハ神殿の南側に位置し、1980 年代に発掘調査が行われた。メンフィスは古王国時代以来、行政上の中心が置かれた古代エジプトの重要都市の 1 つである。
 - 7) 頭部・胴体部の EES No. 462 (H. 11.0, w. 6.3cm) と台座部の EES No. 545 (L. 10.6, w. 5.0, th. 3.7cm) があり、接合したときの大きさ。
 - 8) コム・フィリン遺跡はデルタ地帯西端部に位置する、47ha ほどの大きな遺跡である。確認される最古の遺構は第 19 王朝のラムセス2世治世の神殿址という。コム・フィリン遺跡の 2002 年から 2006 年までの調査報告書が 2008 年に刊行されている (Spencer 2008)。また、エジプト考古最高評議会 (Egyptian Supreme Council of Antiquities) に提出した各年の概報がインターネットで公開されている (参照 URL: http://www.britishmuseum.org/research/research_projects/kom_firin_egypt/project_reports.aspx 2011 年 2 月 13 日確認)。調査報告書では 2003 年から 2007 年までに 50 点の出土があると記されているが (Spencer 2008: 64)、実際に本文中で言及されているのは 2003 年から 2005 年の調査で出土した遺物である。2006 年以降の出土品は掲載されていない。各年に提出された概報の記載とあわせると 2002 年から 2008 年までの間に 60 点ほどが出土しているようである。
 - 9) ベト・シャン遺跡はイスラエルのガリラヤ湖の南 30km ほど、エズレル平野とヨルダン川東岸を結ぶ交通の要所に位置する。新石器時代からイスラム期までの居住層がテルを形成している。新王国時代にはエジプトのレヴァント地方への拠点となっており、総督居館址も検出されている。
 - 10) 「アコリス」はグレコ・ローマン時代の名称であり、王朝時代には「美しい運河」を意味する「メル・ネフェル (*Mr nfr*)」と呼ばれていた。新王国時代以降は「小山」の意味を持つ「タ・デヘネト (*T3 dhnt*)」の別称も持っていた (Akoris 1995: 3-4)。これが遺跡のランドマークとなっている「岩山」を指していると思われる。
 - 11) 南地区の南斜面および岩山に 100 基ほどのヘレニズム期の岩窟横穴墓が存在することから、岩山北側に広がる「都市域」に対応して、「ネクロポリス」と呼んでいた。南地区から日乾レンガの建造物址も検出されることから、2003 年シーズンの調査概報以降、「南地区」(South Area) と呼んでいる (PR AKORIS 2003)。
 - 12) このマスタバ墓は墓域が形成された最初期の第 5 王朝末に造営されたと考えられ、アコリス遺跡において確認できる最古の遺構である。岩盤を掘り下げて造ったマスタバ墓は南北 10.5m、東西 4.3m をはかる。幅 1.2m の入口墓道がマスタバ墓の北端を限り、その東端から南にむかって岩窟チャペルを内蔵している。チャペルは南北 8.6m、東西 1.4m、高さ 2.2m で、西壁面の 2 個所に「偽扉」(False door) を刻んである。だが、それ以外の装飾はないので、未完成であった可能性がある。2 個所の「偽扉」に対応するように、マスタバ墓上面に南北に並んだ 2 基のシャフト墓が存在する。北シャフトは開口部 1.1m 四方、深さ 5.0m をはかり、その底に 2 つの墓室を設けてある。南シャフトは 1.1m 四方の開口部から、深さ 2.5m のシャフトが掘削され、北に墓室が延びている。また、ナイル河谷に面したマスタバ墓西面のファサード前に 6 基の小さなシャフト墓が並んでいる。
 - 13) 厨子 (naos) は 5 点出土している。高さ 6cm、幅 2～3cm 程の直方体で、非常に粗い造りである。内部に粘土を棒状に丸めた「御神体」が納入され、山花がヘビまたはネコの可能性を指摘している (PR Akoris 2002: 17, fig. 12-11; 山花 2003)。ヘビに関しては本稿で取り上げているコブラ形土製品に、ネコに関してはファサード前からネコのミイラが出土していることに依拠しているものと思われる。
 - 14) ワニ形土製品は 7 点出土している。そのうち 6 点は同じ墓 (17 号墓) から出土しており、長さ 8.6～12.7cm、幅 2.6～3.7cm をはかる。未焼成の粗製品であり、細く突き出た顔と長い尻尾、短い四股が表現されている (PR Akoris 2007: 17, Fig. 12-Nos. 8, 13-18)。これらは生殖と豊穡に関連付けられるソベク神を表わしていると思われる。ソベク神はアコリスの地方神であり、遺跡からはナイルワニのミイラが多数発見されている。また、ソベク神がラムセス3世と太陽神アメンと共に描かれた磨崖レリーフが存在している (Habachi 1974; Akoris 1995: pl. 4)。
 - 15) ネコは特にバステト女神と関連して神格化された動物であり、多産を象徴する聖獣として扱われた。
 - 16) レリーフに描かれている女神はギリシア神話またはローマ神話に登場する、アルテミス (Artemis)／ディアナ (Diana)、もしくはヘレネー (Helen)／デンドリーティス (Dendritis) と言われている (Bernard 1988: 135; 山花 2003: 72)。
 - 17) 2004 年度の調査概報の中で内田が人形木棺の年代について報告しており、21～22 王朝としている (PR Akoris 2004: 10-12; Aston 2009: 111-112)。
 - 18) 南地区は斜距離 80m ほどの北斜面の上方から平坦面までを A～J 区、平坦面の西側を K、L 区、南斜面が M 区と仮称している。出土の内訳は、A: 0, B: 29, C: 53, D: 13, E: 39, F: 9, G: 5, H: 1, J: 13, K: 53, L: 10, M: 4、表採 6 点となっている。
 - 19) 古代エジプトの宗教において、太陽は最も重要な構成要素の 1 つと思われる。太陽神ラーは多くの神々と習合しているため、他の神々も日輪を頭飾りとして戴くことが多い。古代エジプトの有力な神々を通覧すると、太陽神ラーと習合し、新王国時代には最高神の地位にあったアムン＝ラー神は、日輪はもちろんのこと、2 本の羽毛飾り付の冠を戴く人間の姿で表わされ、また湾曲した角を持つ雄羊に象徴された。死と再生の神であるオシリス神は両脇に羽毛飾りがついたアテフ冠が象徴的であり、豊

穰神のミン神も2本の羽毛飾りを戴いている。王の母または妻と位置付けられ、雌牛の姿で表わされるハトホル女神は日輪を挟んだ雌牛の角を戴き、ハトホル女神と同化していったイシス女神も同様の頭飾りを持っている。アコリスの都市神であったソベク神は日輪を伴う角と、羽毛飾りからなる冠を戴くことが多い。コブラの姿で表わされるメレトセゲル女神は日輪と角、レネヌテト女神も日輪と角、ときには日輪の上に2本の羽毛飾りが付くこともある (Wilkinson 2003)。

- 20) 2007年に2本の羽毛飾りを頭上に戴いたコブラ形の木製品が斜面中腹にある住居の一室から出土している。下端が凸状に突起しているため、家具などの装飾部であったと思われる。l. 29.2 × w. 4.7 × t. 3.3cm (PR Akoris 2007: 10)。
- 21) このヒト形小像は類例が全くない製品で、頭部が意図的に破壊されていることが最大の特徴である。小像が子供の姿を模した「形代 (カタシロ)」に当たり、意図的に小像の頭部を破壊することで子供に「死」を与える共感的な呪術的行為が行われていたことを拙稿で論じた。その権能として、子供の健康な成育、母親の安産、穀物の豊穡、家畜の多産など、広く豊饒の願いを込めて作られたものだと推察した (花坂 2009)。
- 22) 眼がつく例は、表中の番号で Nos. 50, 56, 110, 112 の4点である。なお、うち3点は西地区から出土している。
- 23) 表中で「隅九肩」は◎、「なで肩」は△、「いかり肩」はで示している。
- 24) 石灰岩製ステラの上端部。幅14cm、高さ7.5cm。第19王朝。テーベ出土。ピートリ博物館の所蔵品に関しては、デジタルアーカイブで閲覧が可能である (参照 URL: <http://petriecat.museums.ucl.ac.uk/detail.aspx#57777> 2011年1月29日確認)。
- 25) 古代エジプトの「赤」の色に込めた象徴的意味には、血や太陽から連想される生命と再生といったプラスの面もある。しかし、一方では不毛な赤い砂漠や炎と結び付き、災いや危機や怒りといったマイナスの面が強調され、「赤きもの red things」は邪悪や危険の総称でもあった (Wilkinson 1994; Pinch 2001)。
- 26) 呪術文書は O. Gardiner 363 として知られている (別名 HO109.1 = 英国アシュモレアン博物館蔵 H. O. 363)。石灰岩にヒエラティックで書かれた12行が残存。デイル・エル＝メディーナ遺跡出土のラムセス朝期のものと考えられている (Ritner 1990)。また、Ritner は「エジプト各地からコブラ形土製品 (Cray serpents) が出土している」と記しているが、形状などは明示していない。しかし、196頁の註121に製品が出土している遺跡のリストが挙げられており、本稿で扱っているコブラ形土製品と同一のものを指していることが分かる (Ritner 2008: 196)。ウラエウスと特定はしていないが、その機能が「悪夢除け」である可能性も述べられている (Szpakowska 2003; Stevens 2009)。
- 27) レネヌテト女神の崇拝が盛んであったメディーネ・マアディの祭礼では、レネヌテト女神はソベク神とホルス神の二神と関連付けられていた (Shaw and Nicholson 2008: 274)。
- 28) ‘...symbolically protecting individual households by ‘sympathetic’ means from the specific and generalised dangers incarnate in the form of the cobra.’ とあり、「sympathetic」は社会人類学者の J. フレイザーの「金枝篇」(1890年)にある「共感呪術 Sympathetic Magic」の理論を意識したものと思われる。
- 29) 古代エジプトの「宗教」や「信仰」の研究において、用語の定義やそれが示す範囲などは明確に区分されていない。英語文献において、Religion と Magic, Cult, Belief, Faith, Piety を厳密に使い分けることは少なく、総じて Religion を用いる場合が多い。さらに「公」と「私」、言い換えれば「国家宗教 State/Official/Public Religion」に対しての「個」による信仰に関する単語はよ

り煩雑である。Shaw and Nicholson (2008) の「Religion」の項では、「State 国家」で信仰される神に対し、「Popular」「Household」の単語が使用されている (Shaw and Nicholson 2008: 273-274)。英語文献では「個」による信仰を表す単語として、Personal, Popular, Private, Practical, Domestic, Household, Folk (順不同) などが用いられる (Baines 1987; Boghouts 1994; Bomann 1991; David 2009; Friedman 1994; Kemp 1995; Lesko 2008; Luicelli 2008; Pinch 2006; Quirke 1992; Ritner 1997, 2008; Stevens 2003, 2006, 2009)。これらの用語の定義や、公的・私的の範囲、宗教と呪術の線引きなどについては稿を改めて考察したい。

略号

- Akoris: The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee 1995 *AKORIS: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.
- PR Akoris: Kawanishi, H. et al. (eds.), 2003 *Preliminary Report Akoris 2002*. Ibaraki, University of Tsukuba.
- CoA I: Peet, T. E. and C. L. Woolley (eds.), 1923 *The City of Akhenaten, Part I: Excavations of 1921 and 1922 at El-'Amarneh*. London, The Egypt Exploration Society.

参考文献

- Aston, D. A. 2009 *Burial Assemblages of Dynasty 21-25: Chronology-Typology-Developments*. ÖAW Band LVI, Wien, Verlag für Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Baines, J. 1987 Practical Religion and Piety. *Journal of Egyptian Archaeology* 73: 79-98.
- Bernand, É. 1988 *Inscriptions Grecques et Latines D'Akôris*. Cairo, IFAO.
- Boghouts, J. F. 1994 Magical Practices among the Villagers. In L. H. Lesko (ed.), *Pharaoh's Workers: The Villagers of Deir el-Medina*: 119-130. Ithaca and London, Cornell University Press.
- Bomann, A. H. 1991 *The Private Chapel in Ancient Egypt: A Study of the Chapels in the Workman's Village at El Amarna with Special Reference to Deir el Medina and other sites*. London, Kegan Paul International.
- Borchardt, L. and H. Ricke 1980 *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna*. Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- British Museum 2008 *British Museum Expedition to Kom Firin: Report on the 2008 season*. London, The British Museum.
- British Museum 2009 *British Museum Expedition to Kom Firin: Report on the 2009 season*. London, The British Museum.
- Capel, A. K. and G. E. Markoe (eds.), 1996 *Mistress of the House, Mistress of the Heaven: Woman in Ancient Egypt*. Cincinnati, Cincinnati Art Museum.
- David, A. 2009 Ch.9B: Clay Cobras: Ramesside Household Cult or Apotropaic Device?. In N. Panitz-Cohen and A. Mazar (eds.), *Excavations at Tel Beth-Shean 1989-1996, vol. III: The 13th-11th century BCE Strata in Areas N and S*: 556-560. Jerusalem, The Hebrew University of Jerusalem.
- Friedman, F. D. 1994 Aspects of Domestic Life and Religion. In L. H. Lesko (ed.), *Pharaoh's Workers: The Villagers of Deir el-Medina*: 95-117. Ithaca and London, Cornell University Press.
- Giddy, L. 1999 *Kom Rabra: The New Kingdom and Post-New Kingdom Objects*. London, The Egypt Exploration Society.
- Habachi, L. 1974 Three Large Rock-Stelae Carved by Ramesses III near Quarries. *Journal of the American Research Center in Egypt* 11: 69-75.
- Hörby, M. 2009 *Personal Identity and Social Power in New Kingdom and Coptic Egypt*. (BAR International Series 2031), Oxford, Archaeopress.
- James, F. W. and P. E. McGovern 1993 *The Late Bronze Egyptian Garrison*

- at Beth Shan: A Study of Levels VII and VIII, vol. I. Pennsylvania, University of Pennsylvania.
- Jeffreys, D. G., J. Malek and H. S. Smith 1986 Memphis 1984. *The Journal of Egyptian Archaeology* 72: 1-14.
- Johnson, S. B. 1990 *The Cobras Goddess of Ancient Egypt: Predynastic, Early Dynastic, and Old Kingdom Periods*. London and New York, Kegan Paul.
- Kawanishi, H. et al. (eds.), 2003- *Preliminary Report Akoris 2002-* [ab. *PR Akoris*]. Ibaraki, University of Tsukuba.
- Kemp, B. J. 1981 Preliminary Report on the El-'Amarna Expedition, 1980. *Journal of Egyptian Archaeology* 67: 5-20.
- Kemp, B. J. 1995 How Religious were the Ancient Egyptians?. *Cambridge Archaeological Journal* 5-1: 25-54.
- Kemp, B. J. and A. Stevens 2010 *Busy Lives at Amarna: Excavations in the Main City (Grid 12 and the House of Ranefer, N49.18)*, vol. II: The Objects. London, The Egypt Exploration Society.
- Lesko, B. S. 2008 Household and Domestic Religion in Ancient Egypt. In J. Bodel and S. M. Olyan (eds.), *Household and Family Religion in Antiquity*: 197-209. Oxford, Blackwell.
- Luiselli, M. 2008 Personal Piety (Modern Theories Related to). *UCLA Encyclopedia of Egyptology* (Open Version; <http://escholarship.org/uc/item/49q0397q>), Los Angeles, UCLA.
- Peet, T. E. and C. L. Woolley (eds.), 1923 *The City of Akhenaten, Part I: Excavations of 1921 and 1922 at El-'Amarnah*. London, The Egypt Exploration Society.
- Pinch, G. 2001 Red Things: the Symbolism of Colour in Magic. In W. V. Davies (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, 182-185. London, The British Museum Press.
- Pinch, G. 2006 [1994] *Magic in Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Quirke, S. 1992 *Ancient Egyptian Religion*. London, British Museum Press.
- Ritner, R. K. 1990 O. Gardiner 363: A Spell Against Night Terrors. *Journal of the American Research Center in Egypt* 27: 25-41.
- Ritner, R. K. 1997 [1993] *The Mechanics of Ancient Egyptian Magical Practice* (SAOC no. 54). Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Ritner, R. K. 2008 Household Religion in Ancient Egypt. In J. Bodel and S. M. Olyan (eds.), *Household and Family Religion in Antiquity*: 176-191. Oxford, Blackwell.
- Rose, P. J. 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*. London, The Egypt Exploration Society.
- Shaw, I. and P. T. Nicholson 2008 [1995] *British Museum Dictionary of Ancient Egypt*. London, The British Museum Press.
- Spencer, N. 2006 *The British Museum Expedition to Kom Firin: September-October 2006 season, Report to the Supreme Council of Antiquities*. London, The British Museum.
- Spencer, N. 2007 *The British Museum Expedition to Kom Firin 2007: Report to the Supreme Council of Antiquities*. London, The British Museum.
- Spencer, N. 2008 *Kom Firin I: The Ramesside Temple and the Site Survey*. London, The British Museum Press.
- Stevens, A. 2003 The Material Evidence for Domestic Religion at Amarna and Preliminary Remarks of its Interpretation. *Journal of Egyptian Archaeology* 89: 143-168.
- Stevens, A. 2006 Private Religion at Amarna: The Material Evidence (BAR International Series 1587). Oxford, Archaeopress.
- Stevens, A. 2009 Domestic Religious Practices. *UCLA Encyclopedia of Egyptology* (Open Version; <http://www.escholarship.org/uc/item/7s07628w>), Los Angeles, UCLA.
- Szpakowska, K. 2003 Playing with Fire: Initial Observations on the Religious Uses of Clay Cobras from Amarna. *Journal of the American Research Center in Egypt* 40: 113-122.
- The Paleological Association of Japan, INC. Egyptian Committee 1995 *AKORIS: Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.
- Wilkinson, R. H. 1994 *Symbol and Magic in Egyptian Art*, London and New York, Thames and Hudson.
- Wilkinson, R. H. 2003 *The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt*. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Ucko, P. J. 1968 *Anthropomorphic Figurines of Predynastic Egypt and Neolithic Crete with Comparative Material from the Prehistoric Near East and Mainland Greece*. London, Andrew Szmidla.
- 池田 潤 2007 「カナシ発信のアマルナ書簡の位置情報について」『一般言語学論叢』10号 93-116頁。
- 内田杉彦 2004 「古代エジプト人と神々」『明倫歯科保健技工学雑誌』7巻1号 39-44頁。
- 花坂 哲 2004 「古代エジプトの皮革技術 - アコリス遺跡検出の「皮革工房址」をめぐって -」『筑波大学先史学・考古学研究』15号 53-77頁。
- 花坂 哲 2005 「皮革製サンダル考 - エジプト・アコリス遺跡を例に -」『西アジア考古学』6号 87-101頁。
- 花坂 哲 2006 「アコリス遺跡出土の土製鋳型とガラス製ビーズに関して」『GLASS』49号 33-40頁。
- 花坂 哲 2009 「アコリス遺跡における「豊饒の民間信仰」 - 土製ヒト形小像から探る -」『筑波大学先史学・考古学研究』20号 51-74頁。
- 藤井信之 2008 「リビア王朝の地方支配と神殿 - 前1千年紀前半エジプトの支配体制の変容 -」『古代史年報』6号 1-20頁。
- 山花京子 2003 「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について: 中部エジプトのアコリス遺跡を例に」『文明』No.3 67-76頁。

図版出典

図1、図3～5および表1 筆者作成

図2-1, 2 (Szapkowska 2003: Figs. 4, 5); 3 (Spencer 2008: pl. 167); 4 (Spencer 2008: pl. 164); 5, 6 (James and McGovern 1993: pls. 39c, 39b); 7 (David 2009: photo 9.17. e); 8-10 (Giddy 1999: pl. 3-516, pl. 4-462/545, pl. 3-521)

花坂 哲

筑波大学人文社会科学研究所

Tetsu HANASAKA

University of Tsukuba